
黒鉄色のシンフォニア

逆月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒鉄色のシンフォニア

【Nコード】

N4117I

【作者名】

逆月

【あらすじ】

これは『黒鉄色のノクターン』という、ここで書いている作品の短編集です。黒鉄で検索すれば多分始めの方に出ます。

その作品のショートストーリーというヤツであり、番外編であり、逆月自身の気分転換が多分に含まれた作品でもあります。

それぞれが独立して読める作品となるように書いてはいますが、用語や世界観の説明が足りない部分もあるかもしれません。

努力はしていますが、携帯メール投稿の文字数限界には勝てません。本編も読んで頂けたら分かりやすいかと思えます。宣伝みたいでイ

ヤなごじふたじ.....。

1・『不貫』のシロツメ草（前書き）

試験的作品第一弾。書いたのは『葵草の憂鬱』の方が先ですが、編集が終わったのはこちらが先だったりします。

こちらと『副官』のどちらが良かったかを聞かせて頂いて、この短編集の傾向を決めていこうかな、と。

それで良かった方の続きを書き、その傾向で今後も書いていこうと思っっています。

悪かった方は、多分削除するかお蔵入りです。

時間的余裕からメチャクチャ掛け持ちはしたくないですし、『本編が上がらない！』なんて、間抜けで本末転倒な真似にはしたくないからです。

1・『不貫』のシロツメ草

「ホンマ死ねばええのに……」

彼はボソツとそう言うと、自分を囲む者達を茫洋と見据えた。

辺りは荒廃したビル群が立ち並び、倒れた電柱がその身をかたどっていた欠片を撒き散らしていた。

砕けたコンクリートが風化して宙を舞い、放置されたまま野ざらしにされたゴミが、その存在感を悪臭をもって表現する。

そんな中で、彼は1人周囲を取り囲まれ、退路を断たれながらも悄然と佇んでいた。

その身に纏ったレザーのハーフジャケットは、十代後半の男の割に小柄な体格にはやや大きく、ローライズジーンズは文字通りに穴あきだらけだ。目にかかるほどには長い褐色の髪だけが僅かに風に靡いている。

そう、彼は黒光りする銃口と明確な殺意を向けられていても、ただポーっとつつ立っているだけだった。

その瞳には何も映ってはいない。

なにしろ目蓋が閉じられたままなのだから、何かが映るワケもない。

それゆえに周囲を囲まれている事に気付いていないのか、と云えばそういうワケでもないようだ。

なにしろ彼を取り囲んでいる連中は、瞳を閉じ、視界を潰しても分かる程に殺気だっている。そしてどよめいている。

「……ホンマお前ら死んでまえばええねん。面倒やし、うっといし、とりあえずいらんねん」

訥々(とつとつ)と語る口調は気怠く、本当に面倒くさそうな色のままで……

その表情にはなんの感情も浮かんでいないままで、彼は最後にポツリと呟いた。

低く、小さく、でも良く通る声で 純然たる『死刑宣告』を。

「……もう死ねや」

そう言った声は、荒れたモノでも、狂った声でもない。

無感情で、狂気も正気もないただの通告だ。機械が発する駆動音と同じような響きで、人が発する言葉を言い放っただけだ。

しかしそんな言葉だからこそ、周囲を囲む者達には大きな恐怖を与えた。

まだ狂気にまみれていた方が……あるいは憎悪に染まっていた方が恐怖は薄いだろう。

向かい合っているのだ、何も言葉はなくともいずれば殺し合う定めなのは、ここにいる誰もが理解していた事だ。

そこに憎悪がなく、狂気もなく、悲観も諦観もない言葉が混じる事にこそ逆に恐怖する。

そう、その男が発する言葉は色彩も響きも全てが異常だった。

そして、その男の正体を……怖さを良く知るからこそ、周囲を囲む者達の恐怖は上限をあっさりと超えた。

「こ、殺せつ……」

そう唾を飛ばしながら言ったのは、困む側の人々のリーダー格だろうか？あるいは勇気を振り絞った　もしくは最初に恐怖に耐えきれなかった者だろうか？

その言葉で固まっていた者達の銃口の照準が合わさり……
合わせると同時に、銃を持った者達は悟る。

銃を持つ自分達の方が、狩られる側の存在だという事を。

なにしろ銃口を向けられ、トリガーに指がかけられても、当の男はなんの感情も見せないままなのだから。

それどころか流麗な『口笛』を吹いてさえいたのだから。

その様子は、すでに罠にかかった獲物をわざわざ的にして撃ち殺す猟師のようであり、逃げ場のない兎をわざと逃がして、興を得る獵犬のようでもあった。

その口笛が物悲しいメロディーでさえなければ、楽しんでいると勘違いしかねない。

「い、いかなヤツでも銃で打たれたら死ぬっ！撃て、撃てっ！」

そうゲキを飛ばす声に幾つかの銃声があがる。その言葉を信じた者がいたかは分からないが、恐怖を銃弾に変えたいという気持ちは皆にあったのだろう。

それでも銃声の中、その口笛がやむ事はなく
幾つか銃弾が直撃した男の表情も変わらない。

「GREEN、GREEN GRASS OF HOME……？」

そう言ったのは、囲む側の1人の男だった。

口笛の男が所属する組織を潰す為に送られた、しがない下級兵。その男だけがこの場では知っていたのだ。

この口笛がなんの曲を歌っているのかを……。

変わらず男が口笛で囀るのは咎人が故郷を思ふ曲だった。

深い深い哀愁と、懐かしさを乗せた調べ。

それは死を待つ者の思い出を尊ぶ響きだ。

そんな曲の意味を思い出した時に 彼はいち早く諦めた。

この男を殺す事も、自分が生き残る事も。

この曲は自分達に向けられた鎮魂歌なのだろう……そう理解したからだ。

僅かに時が経ち、囲む者達の全てが銃弾を浴びせ続ける事に飽きた頃……つまりは『銃ではこの男は殺せない』と悟った頃、その調べは余韻を響かせて終わる。

逃げよつとする者はなく、まだ戦おうとする気概のある者はさらにいない。

「……俺には分からへん。シャクナゲが言う『誰かを殺す痛み』つてのが分からへんねん。だからこれぐらいしか出来ん」

そう言つて歩を進める男の歩みは緩く、フラフラと頼りないモノだった。

その歩みの度に、揺られる穴あきだらけにされたハーフジャケットからはポロポロと銃弾が落ちる。

男に向けて放たれた100を超える金属の塊が。

「……ああ、もう一個だけ出来る事があつたわ」

そう言つてゆっくりと掲げた手は、そのまま無造作に正面の男の頭を掴み上げ

「……俺の名前を名乗る事や。いわば最後に手向ける礼儀やな」

無造作に持ち上げた。

まるで人の重量など感じさせない気安さで。

「……俺はヨツバ。『不貫^{ふかん}』のコードをもらつて黒鉄^{ウチ}のトップの楯をしとる」

そしてそのまま地面へと叩きつける。

なんの躊躇いもなく、力を込めた素振りすらないままで……。

地面に咲く真つ赤な徒花にも無表情のまま、その顔に散つた飛沫をも気にしない。

「……まあ、お前らヴァンプには『ブラッディ・クラブ（血染めのクローバー）』なんて呼ばれとるけどな」

その血に正気を取り戻し、逃げようとする者達もいたが、それはすでに遅すぎた。

男　ヨツバと名乗つた男に先ほどまでの緩慢な動きはすでになく、逃げ惑う人々の中を荒れ狂う。

その様相は荒れ狂うと表現出来るのに、その表情や態度だけは先程までと変わらないままで……

「……ホンマ面倒やわ。もうみんなウザイ。死ねばええねん」

ただ祈る間も与えず、感慨も面倒だというモノしか感じさせないまま、ただ淡々と命の火を掻き消し続けていった。

世界は狂っている。

それがちよつとした口癖である男は、さすがに困っていた。

「ヨツバ、もうちよつと穏やかに……と言っか、いつでも全員殺す、つていうのはなんとかならないかな？」

「……ならへん」

茫洋と佇む目の前の男に、だ。

ここはレジスタンス・《黒鉄》にある『黒鉄第三班』の本部だ。かつての地下駐車を改造した空間にあるその一室、三班班長の執務室で、この問答を繰り返したのは果たして何日目だろうか？

そんな事を考えると、さすがに彼 黒鉄第三班・班長の彼も憂鬱になってくる。

彼の目の前にいる男……顔にかかったままの血が固まり気持ち悪いのか、ペリペリと爪で剥がしている男は全くそんな事を気にはしていないみたいだが。

『不貫』のヨツバと言えば、有名人が多い三班の中でもかなり有名な部類にはいる。

班長である彼が『いい意味』で有名なのとは全く逆の意味で、だ
が。

なにしろ彼はやり過ぎるのだ。敵に対しては全く容赦がない。

同じ班の者達であれ、彼と組みたがる……いや、『組んでも構わない』という者は少ないくらいだ。少ないというよりも『2人しかない』とはつきり言ってもいい。

班長である彼と『スイレン』と呼ばれる女性以外は、彼を怖がって組みたがらないし、下にもつきたがらないのだ。

彼は間違いなく三班でも最強の部類の戦士なのに、だ。

一度頼み込んで彼の部下に組みこんだ者の中には、作戦後に『仏門に入って犠牲者を弔う』と言って班を辞めた者すらいるくらいなのである。

黒鉄最精鋭、この国にある全レジスタンスの中でも最強と言われる『第三班』の者ですらそうだったのだ。班長である彼の頭が痛くなるのも仕方ないだろう。

「はあ……、ヒナと組ませるとアオイが『いくらなんでも教育上良くなさすぎる』って言うし、スイレンは他の仲間の指揮もしなくちゃならない。このままだとずっと1人で行動する事になるよ?」

「……かまへん」

「俺がかまうよ。1人で行動させ続けるワケにもいかないんだから
さ」

現在、黒鉄というレジスタンス組織は関西地方を力をもって支配した男……将軍を自称する男と、彼が支配する関西軍を相手取り行動を起こしている。

かの将軍は、関西西部と中国地方を掌握しており、1都市を拠点とするだけの黒鉄は常に劣勢を強いられていた。

現在、この国は数人の『変種』 人の変異種と、それに従う者達に好き勝手に切り取られている。

人の変異種達は、それまで人が持たなかった異能の力を持ち、人を超えた身体能力を持つ者達ばかりだ。そんな者達が決起しこの国を混乱させた。

力を持つ人の変異種の存在が悪い、というワケではない。全ての変異種が力を持って他者を虐げているワケではないのだ。

全ての既存種……力を持たない人々が支配される側なワケではなく、容量よく権力を握る側に回る者がいるのと同じだ。

そんな力に驕らない変種とそんな彼らを理解する既存種が、不当な支配、力におごって好き勝手をする者達ヴァンブに対抗する為に作ったのが『黒鉄』である。

関西の1都市を奪還し、そこを広域の要塞化して公然とヴァンプに反抗している彼らは、幾度となく関西軍とぶつかり合い、お互いを天敵として睨みあっているのだ。

「……俺はアンタを守る為の楯や。他の理解者なんかいらん。楯は楯らしゅうしとくねん」

「お前、それを面倒くささを隠す為の言い訳にしてるだろ？」

素直にもサツと視線を逸らすヨツバに、またも彼は溜め息を1つ。正直ヨツバの偏屈ぶりにはほとほと参っていた。

元々彼が指揮する三班は、頑固で偏屈で、気性の荒い者が多いが、彼はその中でも『頑固さ』と『偏屈さ』だけは群を抜いていた。

班長である彼が動かない時は絶対に作戦に参加しないし、他の者が指揮を取る事も嫌う。嫌うと言うより、絶対にそんな真似は認めない。

その頑固さは折り紙付きで、かつて班長である彼がいない時に、武装した盗賊達が近くで決起した時なども三班だけは動かなかったほどだ。

彼とスイレンが民政部……黒鉄が所属する都市の市政機関……の出動要請をも蹴ったらしい。

嘆願され、懇願され、宥めすかされても動かず、『三班が協力しないならこっちにも考えがある』と民政部に脅されても、『……一回死ねや』と返しただけで相手にすらしなかったらしい。

それをあとから聞いて、同じく遠出していた三班副官がひっくり返りそうになり、班長が溜め息を漏らしたのは言うまでもない。

「はあ、ま、ヨツバにはヨツバのやり方があるんだろうけどさ。でも仲間には絶対手を出しちゃダメだよ？」

毎回呼び出す度　つまりヨツバが作戦に出る度に、最後はこう締め括るのが習慣化していた。それが班長にも自覚出来ている辺りが悩みの種だ。

「……分かつとる。スイレンやアンタを怒らせるつもりはあらへん。アンタの側におれんようになったら、俺の役目が果たせんくなる。」

だから仲間に手は出さへんよ」

「ならまあ、今日『も』帰ってよし。次からは出来るだけムチャクチャはしないように」

「……ん、多分頑張るわ」

最後までのならりくらししたままヨツバは返し
執務室の扉を開ける手前で一度振り返る。

そして相変わらず瞳は閉じたまま、コクンと首を傾げてみせた。

「……仲間って三班のヤツだけやんな？他は別に」

「他もダメだ！それも毎回言ってるだろっ!？」

不思議そうに首を傾げたままのヨツバを見送り、残った班長は今日何度目になるか分からない溜め息を漏らし、盛大に頭をかきむしる。

「はあ、まあ今回は他班には迷惑かけていないのが救い、かな……
またアオイが頭を下げ回らなくて済むし」

そんな虚しい慰めを自分に対してしながら。

1・『不貫』のシロツメ草（後書き）

この作品のモットー……というか作った元は、そのまんま他キャラクターを主人公にした番外編です。

今回はヨツバ。まだ名前しかでていないクレイジーかつ、関西弁のお人です。

1 『葵草の憂鬱』（前書き）

これも試験的作品です。

お試しとして書いた作品であり、気分転換がかなり含まれた作品でもあります。

これと『不貫』のどちらが良かったかを良ければお聞かせ下さいませ。

1 『葵草の憂鬱』

「ああっ！もう！なんでこんな時に限って！！」

彼は唸っていた。普段は穏やかに笑っているその表情を、今はただ苛立たしげにしかめ、頭を掻きむしりながら。

目の前には山と積まれた書類と、数々の備品が大勢を占める机があるが、そこに突っ伏してしまえたらどれだけいいか……そんな事を考えてしまいが、それだけはさすがになんとか自重した。

そんな事をすれば、雪崩を起こした書類と備品の後片付けに、また顔をしかめる羽目になるのが分かっていたからだ。

別に彼が唸っているのは、目の前に積まれた書類仕事の量が理由なワケではない。

むしろ山と積まれたこの状態こそが、三班執務室にある彼の机のフォーマルスタイルと言えた。

彼は班長の分の書類もいくつか代わりにこなしているし、何より無くなった頃にはまだどっさり足されるのだ。減るワケがない。

その事にいまさら絶望したりなどはしない。書類仕事の多さについては、もう諦めがついているのだ。

今、彼が唸っているのは別の理由である。

「シャクナゲがない時に限ってみんなして面倒を起こすんだから！」

普段の穏やかな口調はどこへやったのか、ひたすらそんな愚痴をこぼす。

穏やかで優しいげ、でも色々と頼りになる副官……そんな評判の面影は欠片も見えない。

だが、そんな事は気にもかけず、彼　アオイはただ天を仰ぐ。心服する班長が早く帰ってきてくれる事を願って。

まあ仰いだ視界に写ったのは、見慣れたコンクリートの天井だ。青い空なんて見えるワケもなく、より閉塞感が募る結果にしかならなかったのだが。

黒鉄第三班本部。

現在はそう呼ばれているこの場所は、かつて黒鉄全部隊の本拠地だった場所だ。

元々地下駐車場だった場所を拡張しただけのモノでしかなく、いつも薄暗い闇に包まれている。

ここには彼等　第三班に所属する黒鉄達の詰め所と、使用する車両や火器などが置かれていた。

居住区はこの街、廃都・カリギユラの郊外に設けられており、この場所が単なる『本部』でしかないのは周知の事実だ。

だがこの地下基地こそが、彼等三班に所属する黒鉄達にとって、最重要拠点なのは間違いない。

もし関西軍がこのカリギユラに侵攻してきたとすれば、彼等は幾重もの防火扉や隔壁で本部を閉ざし、ここを拠点として籠もって抗戦するのだ。

その為の補強も十分すぎるほどされているし、非常食料の類も他班本部とは比較にならないほど備蓄されている。

そうして本部を守り、敵を惹きつけながらも、あちこちに張り巡らせた網目状の地下道を通り、市街を侵攻する関西軍に不正規戦つまりはゲリラ戦を仕掛けるのだ。

食糧や武器弾薬を運ぶ関西軍の輜重部隊を襲撃し、他の班本部を襲撃している敵を背後から攻撃する。

このゲリラ戦こそが、7つに班分けされる前から伝わる三班の防衛戦でのやり方であり、関西軍をこの街から撤退させた黒鉄の戦い方だった。

もちろん危険の多い闘い方ではある。普段は生活空間でしかない市街地に大量の罾を仕掛けておくワケにもいかず、ゲリラ戦といっても少人数による奇襲を主とするモノなのだ。

いくら地の利があっても、当然のごとく多くの戦死者が出る。

それは関西軍からこの街を奪還した際より残るコードフェンサーが、黒鉄全部隊を見渡しても『シャクナゲ』『スズカ』『スイレン』『アゲハ』の4人しかいない事も証明している。

それゆえにここには多くの血と戦死者の魂が籠もっているとわれ、一部を除いて他班の者は近寄りもしない。

そんな曰わくありげな場所で、三班副官である彼が延々唸っているのにはワケがある。

まず、三班の絶対的支柱である班長・シャクナゲがいない。

今は今度の作戦の為に、隣にある戦都・クリシュナへと出向き、現地の友好組織である『白鷺』と話し合っているのだ。

わざわざ三班の班長である彼が出向くだけあり、久々に大がかりな作戦だ。

これはまあ仕方がないと言えよう。

今までも何度かこういう事があったし、それぐらいなら対処が出来る。

だが、それに合わせるかのように、三班の問題児である『ヒナギク』が、他班と面倒を起こしたのはマズかった。

よりにも寄って、黒鉄第一班の班長であるナナシにケン力をふっかけたらしいのだ。

シャクナゲや第三班に対抗心剥き出しの一班に……しかもその班長にケン力をふっかけるなんて、どういった経緯だったのか。

「ま、だいたい想像はつくけど……」

大方、ナナシがまたシャクナゲに勝負をふっかけようとしてやって来たモノの、肝心のシャクナゲがおらず文句でも漏らしていたのだろう。そこをヒナギクが聞きとがめたに違いない……そんな経緯があっさり浮かぶ事にも、彼はやや虚しさを覚えた。

「ヒナも聞き流せばいいのに……」

自分やスイレンならば気にも止めず、右から左に聞き流していただろう、そう彼は思う。

なにせ、一班のナナシがシャクナゲに絡みに来るのは毎度の事なのだ。

彼がシャクナゲには負けないという自負と自信を持っている事は分かりきっている。

『シャクナゲ』という看板にかかった有名税ってヤツなんだろう、そう理解もしている。

ナナシの口が悪い事も同上だ。

いちいち気にしてなどいられない。

そこにヒナギクがいた事だけが、単に運の尽きだったと言うだけ

だ。

彼女はそういった洞察は出来ないタチだし、シャクナゲや三班の仲間への文句を言われ、引き下がれるようなクチでもない。

恐らく猛然とナナシに食ってかかったに違いない。

なにしろ黒鉄唯一の純正型であり、力だけなら『黒鉄最強』とも言われるコードフェンサー、七班班長『銀鈴のスズカ』にも食ってかかるような少女だ。

一班の班長だろうが、悪名高い二班の班長だろうがお構いなしだろう。

しかも今回に限っては、ヒナギクとナナシだけの問題に収まっていなかったりするのも問題だった。

「スイレンまで頭を突っ込むなんて何があっただんだか……」

そう、今回の騒動には『水鏡』のコードを持つ女性が、ヒナギクに味方をする形で揉め事に割って入っているらしいのだ。

多分、ヒナギクとナナシが揉めている最中に見ていられなくなり、止めようと口を挟んだのだろうが、それが今回の揉め事をより大きくした。

なにせ水鏡のスイレンとえば、三班のコードフェンサーでもナンバー2だ。いや、実力だけで言えば、班長であるシャクナゲよりも上だとすら言われている女性なのである。

そんな女性が仲裁しようとしても、三班に対抗心を持つナナシがどう反応するか……。

「引き下がるワケないよねえ……」

武闘派で知られる一班の班長が、水鏡が出てきたから引き下がる、なんて真似が出来るワケもない。

現に俄然やる気を出したらしいナナシの下にはその麾下の一班のメンバーが集まりだし、呼応するかのように三班の連中も集まっているのが現状だ。

そうやって自然睨み合う形になり 現在三班本部の入り口では、黒鉄『強行班』と黒鉄『決戦班』の二大前衛部隊が集結していたりする。

ヒナギクが原因なのだから個人で決着を付ければいいようなモノだが、そうはいかないのが困り物である。

なにせ彼女は、三班のメンバーから受けがいいのだ。メンバー全員の妹分として可愛がられている。

普段は達観した風のあるスイレンですら、ヒナギクには大きな期待をかけているらしく、幾分甘いところがあるくらいだ。

その上相手が日頃から突っかかってくる一班だとすれば、三班も引き下がりはないだろう。

なにせ三班のメンバーは、自分達こそが黒鉄最精鋭だという自負がある。

『黒鉄』のコードを持つシャクナゲの部隊だという自信がある。一番古くから戦ってきたと考えている。

突っかかってこられて引き下がるような連中ではない。

唯一の救いは三班最後のコードフェンサー、『不貫』がこの騒動に参加していない事くらいだろう。

だが、彼は非常に変わり者だ。その居場所すら把握出来ておらず、また居場所が分かっても協力など仰げないだろうと思う。

むしろ『出来るだけどこか騒動からかけ離れた場所に来てくれ』と願うくらいだ。

「ああ、シャクナゲ、本当に早く帰ってきて下さい！」

こんな大掛かりな騒動を抑えられるとすれば、彼ら三班のメンバーが信頼し、心服している班長ぐらいだろう。

副官でしかない自分に、そんな権威や名声がない事くらいは彼も知っている。

また彼ならば一班の連中も抑えられるはずだった。

ナナシや一班のコードフェンサー達は別として、他のメンバーに『シャクナゲ』と争う気概のある連中などいないだろう。

それに一般班員のほとんどは、シャクナゲが黒鉄の創立メンバーである事にも敬意を払っているだろうし、彼のネームバリューによって現在のカリギュラが小康状態を維持出来ている事も知っていると思う。

つまるところ今現在の状況は、彼さえいれば全て解決するとも言えた。

「ああ！もう！」

三班本部入り口では意気上がるナナシと、現状に首を傾げているスイレンが、それぞれ仲間を引き連れ睨みあっているであろう状況に、アオイがそんな懊惱の声を上げた時だった。

「頼もお　　！！」

「……もお」

ドカンと蹴破るような勢いで部屋の扉が開けられたのは。

三班班長の執務室であるこの部屋を、ここまで勢いよく開ける輩は1人……今も睨み合いに参加しているだろうヒナギクを覗けば……1人しかない。

「あれ？シャクってばいない……なんで副官しかないの？」

「……今はクリシユナへ出向中。……昨日確かに言ったハズよ」

二班班長にして『紅』のコードを持つ少女である。隣にいる背の低い白髪の少女は彼女の副官だ。

真っ赤な髪と同色の瞳。女性にしてはやや高い身長と細身の体を持った彼女と、そのお供である副官の少女は、それこそ2日と間を開けずここを訪れる。

二班も三班と変わらない量の書類仕事が回されているハズなのだが、そんな様子は全く見えない。

しかもここを友達の家か何かと勘違いしているのだろう。今日は食堂から持ってきたらしいお弁当と、トランプまで持参していた。

いつもの彼ならそんな2人を苦笑と共に迎えるところだ。

班の機密事項が記されたモノはちゃんと別に隠してはあるが、それでも他班の班長が　しかも三班の執務室に平然と遊びにくる様子に、諦めの入った苦笑を浮かべながらも椅子を進めてやっただろう。

だが、今日ばかりは地獄に仏とばかりに諸手を上げて出迎える。

「カーリアン！よく来てくれました！！」

恐らく彼女らは、いつも通り二班本部近くの裏道から入ってきた

のだろう。そこにも彼は感謝する。

正面からやってきたのなら、睨み合いをしている状況に『面倒はゴメン』と引き返していただろうから。

「あん？珍しいね。なんか副官に歓迎されたよ、カクリ？」

「……アオイもカーリアンの可愛さに気付いたのね。……ちょっと遅かったけど……さすがは三班の副官、と言ったところかしら？」

もう1人いたっ！ナナシ達を抑えられる人物っ！！その思いに、踊り出さんばかりの勢いで彼は立ち上がった。

そして彼女らをもてなすように椅子を進め、とっておきの茶葉を奥から取り出す。

いつもは『お茶っ！』と催促するのに、その欣喜雀躍する様子に面食らったのか、2人はなすがままに椅子に座る。

「……シャクがいなくなつて副官も寂しかったのかな？」

「……ふっ、堂々としてなさい。……カーリアンは奉仕されるだけの可愛さを持つているんだから」

そんな勘違いをした2人の言葉も今は全く気にならない。

なにせカーリアンなら、今の騒動の中でも一番やる気のナナシを抑えられるハズなのだ。

彼女が強力なコードフェンサーだから、といった肩書きなどは関係ない。

彼女がナナシとも仲が良く、三班とも友好的だから………というのも関係ない。

単に彼女が『ナナシが惚れている相手』であり………全く頭が上が

らない相手だからである。

1 『葵草の憂鬱』（後書き）

こちらは本編でも主要のキャラクターを使った『日常』をモットーにした作品であり、番外編というよりも文字通り短編といった形を取って書いています。

2 『葵草の憂鬱』（前書き）

なんか憂鬱って感じじゃないですね、後編。

感想に日常ぽいモノがいいとあり、なおかつこちらの方がいいとも知り合い……他のページで知り合った方にも言われたりしたので、こちらを上げます。

ヨツバは多分お蔵入りかな。

また感想やなんかで要望があれば考えてみます。

やっぱり本編で出してないウチにヨツバを出したのは失敗かな、とかも考えてみたり。

今現在は、次のSSについてまだ考えていません。

気分転換作品に近いので、またネタが出たら あるいはこちらは本編と違って感想や要望を取り入れて書いていこうかな、と思っますので、何か要望がありましたら書いていきます。

本編は最後までプロット練ってますから要望が入る余地はないんですけど。

何が言いたいかを要約しますと『不定期更新』です、という事です。

2 『葵草の憂鬱』

……最強の黒鉄は誰だ？と聞いたとしよう。

黒鉄第三班の者ならば、まず間違いなく『シャクナゲ』だと答えるだろう。なんの迷いもなく、それ以外の答えがあるのか？と言わんばかりに。

1人たりとも別の名前を挙げる者はいまい。

……彼は目の前の光景を見ながらもそんな事を思う。

では他の班の者に聞いたらどうだろうか？やはり『スズカ』を挙げる者が多いだろうか？

もちろんナナシを挙げる者もいるだろう。カーリアンを挙げる者もかなりの数だと思う。

あるいは五班の者なら、アゲハを従えるカプトを挙げるかもしれない。強者を従える事もまた力には違いないだろうから。

それでもやはり『スズカ』を挙げる者が多いだろうか？

……目の前の光景から逃避するかのようによ、いや、逃避したくて彼はそんな事をひたすら考える。

それでも数を見れば『シャクナゲ』を挙げる者が一番なのは間違いない。これだけは確信を持って言える。

最初からこの街、廃都・カリギユラで戦ってきた者達……いわば黒鉄の原点たる者達が集う部隊『黒鉄第三班』の長であり、一癖も

二癖もある班員全てを掌握する変種。

彼を最強最高の黒鉄として慕う者は多い。

……そう内心で思い、それを誇りつつも彼は頭を抱えていた。

『紅』のカーリアンの力は圧倒的だ。

『銀鈴』のスズカは反則的とも言える。

『不死身』のナナシの生命力は文字通り不死身に近いし、『幻影』のアゲハに至っては何故強いのかすら分からない。

そんな変種達……中でもコードフェンサーと呼ばれる『人々』を抑え、最強と呼ばれるのは間違いなく誉れだ。

三班のメンバー全てが、その事実 最高の黒鉄が指揮する部隊にいる事を矜持としている。

副官である彼自身は、比較的彼我の差を冷静に見てしまう性質なので、『最強』はシャクナゲではないと思っっている。

『最強』ではなく、『最高の黒鉄』を挙げるなら、間違いなくシャクナゲだというのは自信があるが。

……それでもその存在が大き過ぎるのは問題かな、と自嘲的に彼は嗤い

「なんでカーリアンまで揉め事に首を突っ込んでいるんですかっ！
？」

思わずそう叫ばずにはいらなかった。

「あん？もう一回言ってみな、このチビッコっ！..!」

「何度でも言っただけですっ！カーリアンなんかナナシとでも仲良くしてればいいんです！シャクナゲに迷惑ですからあんまりウチに顔を出さないで下さいっ！」

「.....もう知らない」

目の前では彼の頼み（懇願）通りにナナシを追い返してくれたカーリアンと、彼女にべったりとくっ付いているカクリ.....

そして、何故かそんな彼女達に対し意気盛んに啖呵を切るヒナギクと、面倒そうに肩をすくめ、明後日の方向を向いて知らんぷりをしているスイレンがいた。

さっきまでヒナギクと向かい合っていたナナシは、ここを立ち去る直前までぶつぶつ言っただけだが

『こんな子供相手にムキになるなんて、ダサいを通り越してキモい.....というよりもしかして変態？』

とカーリアンに言われ

『.....しつこい男は嫌われるのよ?.....器の大きい所を見せてみな

『さいな』

とカクリにまで言われて、ほうほうの体で班員を引き連れ帰っていったのだ。

……そこまでは良かった。そう彼は思う。

いまさら思っても後の祭りなのを同時に自覚しながら。

『子供って……私の事ですかっ!?!』

そうヒナギクがその矛先をいなくなったナナシから、目の前でふんぞり返っているカーリアンに変えた時点で、こうなる事は決定していたのだろう。

『カーリアンなんて救急班班長のクセに、いつもぶらぶらしてるだけじゃないですかっ!?!? そっちの方がよっぽどお子様ですっ!?!!』

『……なっ!?!?』

『……カーリアンはぶらぶらしていいの。……いるだけで癒やしの空間が広がるから』

ヒナギクの啖呵に絶句するカーリアン。そして自分本位の反論をするカクリ。

この時点で カクリが入った時点で収集がつかないのも決定していた、と言えるかもしれない。

なにせカーリアンを止められるのは、彼女か今はいない……早く帰ってきて欲しいと祈り続けている三班班長だけなのだから。

『ぶらぶらしてるだけならそこらを勝手にウロウロしてて下さいっ！話し相手がないなら壁にでもブツブツ言っればいいんですっ！みんながみんなカーリアンみたいに暇じゃないんですからっ！！』

『……こんのクソガキ！』

『シャクナゲも暇じゃないんですっ！カーリアンは暇人同士ナナシとでも遊んでればいいんですっ！！両方迷惑なんですからっ！』

「あん？もう一回言ってみな、このチビッコ！！」

この経緯を思い返して頭を抱えるな、という方が無理な注文だ。もしそう言われたら、抱える頭をなくす為に切り落とすくらいしか道はない……そんな愚にもつかない考えを浮かべながらも、アオイは一縷の望みを託して1人の女性の方向を見やった。

ここにいる三班のメンバーの中では、唯一カーリアンに匹敵する力を持つ女性。

そして怒り狂う彼女を抑えられる……かもしれない理性を持つ人物であり、なおかつヒナギクをたしなめられるコードフェンサー『水鏡』を。

たおやかな和服　浴衣を纏った彼女は、アオイからの熱い視線を感じたのかチラツと視線を向け

「……プイッ」

そんな擬音付きで露骨に目を逸らした。

つまり『もう知らない』と言った言葉を、本当に貫くつもりなのだろう。

「もう容赦しないかね！？シャクの部隊のヤツでも、こんがり焼いてやるっ！！」

「……やり過ぎちゃダメよ、カーリアン。……消し炭にしちゃったら……さすがにシャクナゲでも怒るだろうから」

「むっ、じゃあ生焼け具合のレアでっ！」

一応抑えてくれた……のかどうかは怪しいカクリの言葉に、カーリアンは少し弱気になりつつもその指先から紅蓮の炎を溢れさせていく。

彼女に『紅』のコードを与えた凶悪無比な火力を秘めた炎を。

『紅のカーリアン』は、数いるパイロキネシスト（発火能力者）の変種の中でも、最凶のパイロキネシストだと言えよう。

後方支援部隊である黒鉄第二班唯一のコードフェンサーの名は、決して伊達でも飾りでもない。

今までも前衛部隊が突破されたり、伏兵に奇襲された場合は、彼女がその力で敵を薙払い炎で焼き払って、戦闘能力の低い黒鉄第二班の仲間達を守ってきたのだ。

その赤い髪や瞳だけで『紅』のコードを持つに至ったわけではない。

「ふん！いつも遊んでるだけのカーリアンなんかちっとも怖くないですっ！！決戦班たる三班のコードフェンサーが力、見るがいいですっ！！」

だがその紅蓮の炎に怯むどころか逆に真っ向から睨みすえながら、ヒナギクはぐっと小さな体に力を込めていく。

彼女もまた最年少で最精鋭部隊と言われる黒鉄第三班のコードフエンサーになったのは伊達ではない。その潜在能力は『水鏡』のスイレンにして『自分を上回る』と言わしめた程の逸材でもある。

その『力量変換能力』の一種と思われる力も非常に珍しいモノで、あの紅のカーリアンを相手に回しても簡単にヒケは取らないだろう。

それはつまるところ『この2人がぶつかった場合、決着がつくまで長引き、なおかつ周りには甚大な被害を与える』と言う事に他ならない。

もう収集がつかない、とはこの事だろう。いや、最初から収集なんてつく要素はなかったのかもしれない。

スイレンは手出しをしないようだが、この2人 『音速』と『紅』が争うだけでも相当の被害が出るのは間違いない。

なにしろヒナギクはともかく、カーリアンの能力は本気になれば範囲がかなり広い。しかも二次災害……火事や煙害の被害までありうる。

もつとも、周囲の施設などよりむしろ三班に しかも班長はいないから、副官である彼に回ってくる『始末書』の類の被害が甚大なのも間違いない事だろうが。

そんな絶望感を感じうなだれるアオイだが、それ以外のメンバーもまた戸惑っていた。

やはり救急班にお世話になった者も多いのだろう。その点で気が引けるのかもしれない。

それに自分達が信頼する班長、シャクナゲに懐いている カーリアンは断固否定するだろうが 二班班長と争うのもさすがにい

い気分はしまい。

そんな周囲の状況など全く気にせず、コードフェンサー^{とカクリ}2人は気炎を上げ、今にもぶつかろうとしていた時だった。

「……これはまた派手な出迎えだね？ 一体どんな趣向だよ？」

全員が全員、色んな意味で今一番聞きたいと思っていた男の音が響いたのは。

その声に一斉にその方向 車両が置かれている駐車場区画を振り返ると、大げさに肩をすくめたまだ若い男がこれ見よがしに溜め息を吐いていた。

「しゃ、しゃく、シャク」

「ただいま。予定がちよつと早く終わつてさ。まあタイミングが良かったのか悪かったのかは微妙な感じだけど」

帰還予定日よりもかなり早く、いまいちその存在が信じられずに固まっていたアオイに、黒鉄第三班の班長はそう皮肉げに笑いかけ、その両手に山と抱えた手荷物を掲げてみせる。

「シャク！どっか行くなら一声かけてけつての！おかげでアンタんとコの子ビッコに絡まれて大変だったんだからねっ！？」

「シャクナゲ！お疲れ様です！いない間『暇人達』がウチに押し寄せてきましたけど、大丈夫です！シャクナゲの留守はこのヒナが守

「つてみせますからっ！！」

それになんとか笑い返そうとしたアオイを、当の2人 さつきまで争っていた『紅』と『音速』が仲良く押しつける。

「こら！他班とも仲良くしなきゃダメだって言ってるだろ？」

「で、でも」

じゃれ付いてくるヒナギクのおでこを軽く弾きながらそう言うシヤクナゲに、ヒナギクは軽く不満げに頬を膨らませ

「でもじゃない。ほら、お土産だ。ムクレてたらあげないよ？」

「わあ〜！いるですいるです！ごめんなさあい！！」

手渡された小さな包みにパーツと笑みを溢れさせる。

さつきまでの殺気と威勢の良さはどこにいった？そんな事を理不尽に思いつつも、アオイは小さな苦笑を漏らした。

別に高価な土産物で機嫌をとっているワケでもないのに、あっさりヒナギクを抑えてみせる彼と、その様子にホツとしたように笑う三班のメンバーを見ながら。

「ほら、カーリアンにもある。向こうの露天に綺麗な貝殻を加工したペンダントがあったんだ。耐火性はないけど、カーリアンの色少し赤みがかってて綺麗だろ？」

「わ、わた……あたしにも……くれんの？」

「ま、安物で悪いけどさ」

あのカーリアンですら一瞬で手懐けられている辺りがさすがというべきか、罪作りというべきか。そんないつも通りの考えすらもアオイには微笑ましい。

「……………」

「そんなにジツと見つめなくてもカクリにもあるよ。革命前の文庫本が纏めて市にあったから後で送ってもらおう事にしてる。何冊かはカクリにあげて、残りはヨツバ用だ」

「……………私が先に選ぶ。……………いい？」

キラキラと目を輝かせるカクリなんてそうはお目にかかれまい。そんな失礼な事を思うアオイの前で、彼は人波に囲まれながら次々と土産物の目録を上げていく。

三班メンバーには何種類もの菓子詰めと昔の映画のフィルムをもらって帰ってきたらしい。

埃が被ったシアターセットを引き出す算段と、今夜宴会でも開こうと俄然盛り上がるメンバーに、班長である彼も肩をすくめながらも笑っていた。

「スイレンには……………」

そう言って彼女に渡していたのは、園芸用の花の種とガーデニング用のハサミ。

「新しいのが欲しいって言った気がしたけど、これで良かったか？」

「ありがとうございます。しかしこれらの資金はどうされたの？」

「俺は給金なんか使わないからね。それは気にしなくてもいいよ。次はもう土産とか買えないから期待はするなよ？」

深々と頭を下げながら受け取るスイレンと、そんな彼女に貰ったばかりの土産　精緻な細工のされた髪飾りを見せながら笑うヒナギク。

今夜の映画鑑賞と帰還祝いのお話で盛り上がるメンバーと、もらった土産を付けるべき否かで悩むカーリアン。

その横では「あなたは怒ったら無意識で力を使うから、普段はしまつてなさい」とカクリがたしなめている。

そこにはすでに、先ほどまでのギスギスした空間はカケラもない。空を舐める紅の力の断片も、音速の戦意の余韻もない。それを一瞬で吹き飛ばした男を中心に、人の輪が出来ている。

これこそが……この人を惹きつける魅力こそが、彼を『最高』たらしめている。そうアオイは理解していた。

普通の日常を感じさせてくれる。殺伐としがちな空気を入れ換えてくれる。

そして強大な変種であり、強力な力を持ち、絶大な発言力を持っているながらも仲間達を気遣ってくれる。

いわば『家族』のような空間を班内に作ってくれる。

それが黒鉄第三班の結束と戦意にどれだけ貢献しているか　恐

らくシヤクナゲ自身もその事に気付いているだろう。

『大義名分』や『正義』なんてモノを大事にし続けられる者は決して多くない。だがそこに『居場所』や『信頼出来る仲間』が加われば、簡単に人は諦める事が出来なくなる。

また大事なモノが増えれば、ヴァンプの力に魅了される抵抗力にもなるだろう。

その全てを理解して第三班の在り方を作っているのだとしたら、彼は文字通り最高のリーダーであり、恐るべき黒鉄だと言えると思う。

それこそがアオイに彼を最高の黒鉄だ、思わせる所以だ。

そんな事を改めて考え、安堵と共に喜びを感じていたアオイの前には、当の彼が手を差し出していた。

その手の平にはゼンマイ仕掛けの懐中時計が1つ。

「中古で悪いな。いい形の未使用品は市になかったんだ」

「気を使つて頂かなくても」

「ほら、時計のシンボル……ロゴかな？」

アオイの言葉を気にもせず、差し出された時計。その懐中時計に一片の薄い青の花が象られ、差し出した手の主は小さく笑う。

「アオイが名前の由来に使った葵草ってのは分からないけど、きつとこんなだろうな、と思つてさ。違つても許してくれ」

「……大事に使わせて頂きます」

「いつも色々代わりにやってくれてる礼だよ。気にしなくてもいい

わ」

恭しく受け取るアオイに小さく頷き返すと、またも取り囲んでいる人混みに飲まれていく。

そんな彼をアオイは小さく笑って見送った。

やっぱりあなたにはかなわないですね。

葵草は石楠花の代わりにはなれませんよ。あなたを引き立てる事だけが私の役割なんです。

そんな意味を込めて。

「アオイも一緒に準備しましょう？今日はパーティーといくです！」

「はいはい……」

声をかけてくる妹分に穏やかに笑い返し、その小さな手に引かれ歩き出す。

……今日ぐらいは休んでもいいだろう。また明日も書類の量と面倒事に唸る事になる。

明日にはまた葵草として立たねばならないのだ。仲間達に料理を作って、映画を見て、そして笑い合う。

今のような時代の中でもそんな日があっという間ハズだ。

そんな事を思いながら、彼もまた人の輪へと入っていく。

自分の居場所はここにしかない、この場所ではない、そんな事を嬉しく感じながら。

……葵草、小さな花を付ける植物にも意味はある。そう彼は思っていた。

それは石楠花にはない色で……睡蓮や雛菊とも違う形で居場所を彩る事だ。

自分なりに咲いてみせる事だ。

そう信じられるからこそ、『アオイ』の名前に彼は誇りを持つ。コードのないその身を誇りとするのだ。

2 『葵草の憂鬱』（後書き）

あとがき

アオイさんの目立たせ方に悩みましたが、空気感がいなめなかつた
らごめんなさい。

アオイさんもいい人ですごく好きなんです、今の段階（14辺り）
では目立たせるのが難しいです。

いい人だし、設定も凄く好きな人物なんですけどね。

『ナイトレーヴェン』（前書き）

次は『男の戦い、女の戦い』と題して、メンバー親睦の意味を持たせ、競技会みたいなのを書こうかと思ってきましたが……というより書いてましたが、まだ書き上がっておりません。

カーリアンやオリヒメなどの『女の戦い』側はあっさりと書けても、『男の戦い』側がなかなか……。

なにしろシャクナゲがやる気を出すシチュエーションが、上手くないので、筆が止まっています。

作者泣かせな主人公です。

そう言ったワケで、本来は『ネームレス』の別視点、アナザーストーリーみたいな形で、『番外編』としてノクターンに載せる予定だった話を、先にこちらに載せました。

『戦い』はチマチマと書いていきます。

あくまでも逆月の息抜きの意味合いが濃いSSなので、気長にお待ち下さいませ。

『戦い』の後は『第一回・ミス黒鉄前哨戦』、『予選』、『本選』、『大団円?』と、『ミス黒鉄』系の話を書く予定です。

気長な話になりそうなので、プロットを詰めていきます。

『ナイトレーヴェン』

さて、どうしようか。

そう考えて、彼は少し首を傾げた。

その仕草だけでは、彼が何か重要な考え事をしているようにはまるで見えないだろう。

なにしろ、寝起きだとまる分かりなシヨボつかせているダークブラウンの瞳に、あちこちはねまくった同色の髪が、重大な考え事をしているという雰囲気を弛緩させている。そこに浮かぶ表情も気だるげそのモノで、一見しただけなら、彼はいまだに夢見ごちなままだと思えるかもしれない。

首を傾げているのも、夢と現実の区別が付いていないだけのようにも見えるだろう。

だが、それはあくまでもポーズだ。

彼が彼らしく……無能を気取る為のポーズ。

そして『役立たず』である事を示してみせるポーズだ。

たとえそのポーズがいかに真に迫ったボケ顔であっても、それは彼にとって己の内にある牙を隠す為の鞘に過ぎない。

賢い者、強い者ほど牙を隠すのは上手いものだ。そう彼は考えている。

そして力を誇る者、知識に捕らわれる者は、それだけで損をしていると考える。その姿勢だけでも敵を作りかねないから。そしてそ

の敵に知らしめた力と知識を警戒させかねないからだ。

それすら分からないなら、それら自称・強者や知者の底も知れたモノだと思っ。

無論、そんな事を口に出して言うような本末転倒な真似はしないが。

それが分からないレベルの強者ならば、彼からすれば怖い存在ではない。それが分からない程度の知者ならば、簡単に足元が掬えるだろう。

汚かるうがなんだろうが、油断させたモノ勝ちだ。勝者こそが強者であり、生き残った者こそが知者。そうなる為には力を隠し、知恵を隠す鞘の存在が欠かせない。

いかに鋭い刃だとて、風雨にさらされれば錆び、朽ちるのが摂理だから。

そんな持論を持つ彼も、今だけは悩んでいた。

今から相対する相手……接触しようとする相手は、『力を全く見せない者』で、『知識を過信しない者』だ。自分にだけではなく、多くの者達に全てを隠し通しているような相手だ。

自分以上に強固な意志（鞘）を持つ相手であり、そうまでして力を隠さねばならない相手。

そういう存在と相対しなければならぬかと思うと、嫌な汗が背を伝っ。

それでも今接触を計らねば、ひよっとしたら動き出した時流に乗り遅れるかもしれない。それだけならまだしも、彼が所属する組織が歪にゆがんでしまうかもしれない。

そう思っからこそ、彼はどういった手順で相手に接触し、どういった切り口で出鼻を挫くかを考える。

あくまでも寝ぼけ眼のまま、茫洋と宙を見据えながら。

「ヘルつちに接触した後で、果たしてアイツは俺にも接触しようとするかな？」

口に出して『相手の行動』を予想しながらも、即座にその確率は五分と五分を下回ると判断する。

自分が従うリーダーとの会談が上手くいけば、多分『彼』は自分とは接触しないだろう。

だが、実りが少なければ接触をしてくるかもしれない。

いや、会談がやや不発だったとしても、『彼』なら自分には接触をしてこないかもしれない。

自分が『彼』を警戒している程度には、相手も自分を警戒しているだろう……そう思うから。

ここで相手だけが楽観視している、自分を軽視していると考えるのは浅はかだと彼は分かっている。

なにしろ似た者同士だ。その在り方も、立場も、そして考え方も良く似ているであろう相手だ。自分が相手の『鞘の中身』に気付いている程度には、相手もこちらを知っているだろう。

ならばやはり、自分から『彼』に接触するべきか……そう考えが行き着くと、憂鬱げな溜め息を漏らす。

確率に賭けるには分が悪いし、状況もあまり良くはない。何より相手が最悪だ。

せめてこちらから接触し、会話の出先を掴む程度のアドバンテージは欲しい。

自分の従うリーダーが愚かだとは言わないが、『彼』や自分に比べればやや甘さが目立つのは否定出来ない、そう寝ぼけ眼のままに思う。

恐らく先の作戦の失敗も、『内通者の密告によるモノ』程度に認

識している可能性が高い。

それにより一斉に動き出した各勢力　黒鉄内に潜む様々な思想の動きに、恐らく潔癖で、仲間を信用し過ぎる彼女は気付けてはいないだろう。

黒鉄の秘密を暴こうとする者。

黒鉄の実権を握ろうとする者。

黒鉄の在り方を変えようとする者。

黒鉄の在り方を守るうとする者。

先の失敗は、それらが動きだすには、充分過ぎるきっかけだと分かってはいまい。大きな失敗は、大きな転機にもなりうるのに。

そこに気付いている者が果たしてどれだけいるか……。各勢力自身が、自分達の動きの意味に気付いているかどうかも分からない。

だが、彼女の願っただけは分かっているつもりだ。

彼女の事を誰よりもよく知っている自信もある。多分同じ組織の仲間達の誰よりも。

その望みがなんなのか。今何を考えているか。そして現状に満足しているか。その全てを、大体において把握している。

その甘さも、弱さも、強さにおいても彼はよく知っているから。

それだけ古い付き合いだ。なにしろ昔からの幼なじみで、腐れ縁。

彼女は『近所でも評判の出来た子』で、彼は『近所では不真面目の代名詞』。

でも、なんだかんだで手間がかかるのは、いつも彼女　今は一丁前に堅物を気取っているリーダーの方で、手間をかけられるのは彼。

それが昔からの決まりみたいなモノで、彼は疲れと諦めを含んだ吐息を吐く。

「ま、色々勝手に手を打って、裏でバタバタすんのが俺の役目……てか」

そのせいで今日もまた厄介なことをやらかさなければならぬ自分に溜め息を漏らし、そんな自分が嫌いじゃない事により深い溜め息をつく。

「じゃ、そろそろ行くか。あっちの会談もボチボチ終わるだろ」

どう『彼』を攻めるかは決まっていぬ。どう攻めても不発な気もするし、攻めなくとも逆鱗に触れそうな気がする。

相手は自分と違ってコードを持っていないのに、そんな事すら彼からすればなんの慰めにもならない。

「相手は多分『ネームレス』の1人。コードを持たないコードフェンサー……か。ホント、ただの都市伝説の類だったら嬉しかったんだがな」

ネームレス……コードを持つ事を望まないコードフェンサー。黒鉄でも上位の戦闘能力者達である『コードフェンサーの暗部』。

その存在はずっと囁かれてきた都市伝説で、その存在自体は黒鉄でもそれなりに有名なモノだ。

そう、恐らくは誰も信じていない『ただの都市伝説』として。

世界が狂って、在り方が変わったホラ話……そんな存在を信じる者がリアリストである自分自身だと言ふ事に、ちよつとした含み笑いを漏らし、彼はそつとペタンコのベッドから起き上がる。

リアリストである自分が、こんな狂った世界でどんなリアルを信じるのかは分からないまま。

「……ほんっとヘルっちはいつもいつでもどこであれ手がかかんよな」

そう独り言を呟き、わざとらしく悪態を漏らしながら廊下へと足を向ける。

ヘルっちと呼ばれた幼なじみと会談しているであろう『ネームレス』に、自分が持つ手札（情報）を晒す為、そして敵対はしないと宣言する為の代価^{ペイ}まで用意して。

彼が調べた限りでは恐らくネームレスの1人であろう男……にこやかな笑顔と穏やかな物腰（鞘）で、その牙を隠しているだろう黒鉄最強の部隊、黒鉄第三班の副官であるアオイの元へ。

彼は昔っから面倒くさがりだった。両親は共に海外への出張などで、ほとんど身近にいなかった事もそれを助長したのだろう。

寝てさえいれば幸せで、どうせなら動物園で食っちゃ寝しているだけの たまに気が向いた時にでも、お愛想で愛嬌を振りまく事だけが仕事とも言える、パンダにでも生まれたかった……そんな事を真剣に思っているような人間だった。

それは今でも変わらない。精々『どうせなら平和な時のパンダの

「がいやな」くらいに変わった程度だ。

そんな彼にずっと付きまとい、あーだこーだと世話を焼いていたのが『幼なじみ』。たった1人の理解者だった。

『起きた起きた！いつまで寝てんの！もう朝……ていつか放課後だよ？』

『ほら、寝癖！背を伸ばして！』

『あ、今度の試験勉強、なんなら一緒にしよつか？教えてあげるよ？』

なんでもかんでも世話を焼こうとする幼なじみ。姉ぶって、ちょこまかと周りをうるついていた少女。

彼女の家はかなり裕福で、父親は有名な物理学の権威。有名な大学でも最年少たる若き教授。

彼女の母親も、かつては有名なピアニストでありながら、子供が産まれてからは専業主婦をするような暖かい女性。

そんな2人の才を受け継いだ幼なじみは、いつも面倒くさそうに世間に対して斜に構えて見ていた彼にとっても、密かに一番自慢だった。

いつもは頼りになるのに、肝心なところでは又ケていたり、興味がある事には目を輝かせ、突っ走る辺りも大好きだった。

口にして言った事はないが、彼は彼女の事を手のかかる姉のように、そしてよく出来た妹のように思い、また1人の女性としても彼女が大好きだったのだ。

彼女には厄介な事に巻き込まれたり、面倒な事に首を突っ込まされたりしたけど、それも彼女だから我慢が出来た。

そんなありきたりが、彼にも大切だったから。

でも

そう……でも、彼女は彼と違って『変種』だった。

生まれつきの変種。『自然型』とも呼ばれる自然発生型の変種だった。たったそれだけの事……彼からすれば彼女のステータスの一部でしかなかったそれが、後に幼なじみの平穏を壊した。幸せを奪った。

そして彼が変種となる間接的な原因にもなったのだ。

そう、突然発生型　突然型の変種になる要因の一つに。

それは関東の動乱の余波や海外の影響を受け、2人の地元が最も混乱期にあった時期の事だった。

変種と既存種の争いは日常茶飯事で、それに合わせるように……まるで悪ノリするかのように、あちこちで暴動が起こり、強盗やら傷害がそこら中で起こっていた時期の事。

そんな混乱期の象徴の一つ、既存種である若者による遊び『変種狩り』のターゲットに彼女は挙げられたのだ。

もちろんその『狩り』は、既存種だけじゃなく、変種の若者達もやっていた事だ。既存種を対象に変えた形で。

単にあちこちに火種があり、そんな状況下で退屈を持て余す事がもつたいなかった若者達が、ゲーム感覚でやっていたモノだ。たかが遊びとはいえ、その犠牲者はかなりの数に上っただろう。

その対象に、『変種である事を隠さず、なおかつ色々と目立っていた彼女』が挙げられたのは、当然の流れかもしれない。

なにしろ彼女は美人だったから。若者達の中の罪悪感を凌駕して、その欲望をそそぐくらいには魅力的だったから。

そして彼女は、変種の中でも身体能力が低かったから。

そんな力の弱い彼女を、既存種の若者達は徒党を組み、追いかけてまわした。

時代の動乱により、深い傷を負ったばかりの彼女を　両親を亡くしたばかりの彼女を、無思慮な若者達は追い詰めた。

そんな彼女を、同じ既存種でしかない『怠け者』の幼なじみが守ろうとして……そんな周りから見れば彼らしくない行動によって、彼も彼女と同じになった。

そう、変種の力に目覚める事になったのだ。

ボコボコにされ、地面に倒れ伏した幼なじみの姿。そんな彼女を見て、若者数人に抑え込まれながらも、声も出さずに涙を流す彼女。

……気づけば彼は吠えていた。

若者達を圧倒するような怒りの声を、動乱が始まってからの彼女の不遇を呪って、呪詛の叫びを上げていた。

辺りを渦巻く風の声を聞き、荒ぶるそれを従えて。

幼なじみはそんな彼女を見て……彼が力で薙払った若者達、変種である彼女を敵として襲った既存種達を見て

泣いた。たださめざめと泣いた。

多分彼でも、彼女があそこまで悲しげに泣いていたのは、初めて見たと思う。

それどころか、それ以前の彼女の表情に、涙を見た記憶すらほとんどなかった。

父親と母親が既存種と変種の争いに巻き込まれ、亡くなった際でも彼には涙をこらえてみせたのに、その時の彼女は泣きながら……涙を溢れさせながらこう言ったのだ。

『……ごめんなさい』と。

『私のせいであなただまで変種にしちゃってごめんなさい』と。彼女のせいなんかではないのに。人は誰でも変種に変わり得るのに。自分を傷つけようとした人々と、そんな彼らを蹂躪した幼なじみの為に泣いた。

自分の為には泣かず、他人の為に泣いたのだ。

それからだった。それから彼女は、ことさら強さを示そうとした。行動もそうだが、言葉使いでも彼女は弱みを見せなくなった。弱さを見せる事が、まるで罪であると思っっているかのように。

彼が自衛の為に、そして何より彼女を守る為に、面倒だったけど迫害されていた弱い力しか持たない変種達、あるいは支配を望まない変種達をまとめ、『ゼフィーロス』を立ち上げた時も、彼女は進んでその先頭に立った。

やがて大きくなった『ゼフィーロス』が、関西軍による討伐隊に敗退した時でさえも、自分が仲間達のトップだとして、関西軍に投降しようとはまでしただの。

彼が止めなければ、それを迷いなく実行していただろう。

例え酷い目に合わされ、最後には公開処刑にされると分かっていたても。

その後、危ういところで『黒鉄』に拾われた時も、彼女は逃亡生活で疲れた体を叱咤して、黒鉄のトップ達との話し合いに出向き、真っ向から渡りあった。

昔の　そう、泣いた後に言った『私の為に誰かが傷つくような

真似は絶対させない』という言葉を、ずっとその身に刻み、細い肩に背負ってきたのだ。

その彼女は、今では迎え入れられた黒鉄でも最高幹部の1人となり、『夜鶴』のヘルメスと呼ばれている。

そして、そんな彼女に憎まれ口を叩きながらも、ずっと従ってきた幼なじみは『役立たず』とも呼ばれる『風塵』のマルスになった。

今では大分時も経ち、彼女も笑えるようになってはきたが、幼なじみである彼だけは分かっていた。

彼女がいかに傷つきやすく、そこからは信じられないぐらいに壊れにくいという事を。

壊れられたら………いっそ一回吐き出してリセット出来たなら楽だろうに、彼女はずっと壊れられない。昔から 1度泣いてみせてから溜め込んできているのは間違いない。

いつか心が決壊して壊れた時は、もう元には戻れないぐらいに壊れきってしまうだろう。

だから『風塵』のマルスは、今日も無能を演じ続ける。

敵かもしれない他者を欺く為に。

そして不器用で大切な幼なじみが、昔のままに頼りない自分を見て、いつか昔の奔放さを思い出してくれたら………こんなダメな幼なじみを放ってはおけない、そう思っただけで頑張っていてくれたら………そう勝手に願っただけ。

そしてその裏で彼女が守ろうとする者を守る為に、彼女が負うであろう傷を自身が代わって負う為に、1人で暗躍し続ける。

そう、『夜に舞う鶴』の代わりに。夜鶴の代打として、情報班の立場を守り続ける。

ここが彼女にとって大事な場所である限り。

黒鉄第六班が、彼女の拠り所である限り。

絶対に彼女にだけは、昔とは変わってしまった自分を見せないように、細心の注意を払って。

使わない事を願いながらも、隠した牙をずっと研ぎ続けながら。

今もそれを願いながら、動き出した黒鉄の中心にいるであろう男の側近へと接触を計る。

もちろんいざとなれば、彼女が嫌う『全てを塵に返す風』を使う覚悟だけは胸に秘めて。

『ナイトレーヴェン』（後書き）

カクリの考察・番外編

スキルについて……特殊な能力を持たない変種も多数いる（私のように）が、変種が持つ能力の傾向を挙げておく。

一般的にはパイロキネシス（人体発火能力者）や、エレキネシス（人体発電能力者）、テレキネシス（念動能力者）が最も多い。

黒鉄内を見渡せば、発火能力では私のカーリアンが圧倒的に抜きん出ており、念動能力では四班スクナ、発電能力では五班のコガネが有名である。

その中でも水火風雷といった能力の持ち主は、別称として発火能力者は『火トカゲ』（サラマンダーの事であろう）から『トカゲ』、発電能力者は『電気ネズミ』からネズミ、風系統の能力者は『鎌鼬』からイタチ、水系統の能力者は『水蜘蛛』からクモなどと呼ばれる事もある。

これは一種の蔑称……既存種が変種を蔑んでいた時期の名残であり、今ではあまり使われていない。

カーリアンがオリヒメを『冷血クモ女』と呼んだり、オリヒメが『火吹きトカゲ』とカーリアンを呼んだりと、主に相手を馬鹿にする時に呼ぶくらいである。

なお、能力的には大地の力を操るような能力者は黒鉄にはいない。他の地域でも確認は取れておらず、そういった能力者はほとんどいないと思われる。

風系統を操る能力者も少ないが、マルスはそのコードから恐らくは風を操る系統の能力だと思われるし、シャクナゲもそれ系統の能力を持っている可能性がある。

一般的に突然型はこういった自然の力を操る能力者が多い傾向にあるから（カーリアンやオリヒメなど）、マルスも突然型ではないかと睨んでいる。

対して自然型は、身体能力の一部が強化されたタイプや、念動能力者が多い。これはシャクナゲやナナシが当てはまる。

純正型については分かっていない。スズカと何度も組んでいるカーリアンの話からすると、恐らくは念動能力……その極大化したタイプの能力だとは思うが……。

やはり生まれつきの変種同士、自然型の傾向と似るのだろうか？

アカツキの能力が分かれば、純正型の秘密の一端が掴めそうなのだが……

情報班の資料庫に残るアカツキの項目を知りたい。そこには、私が望む疑問の答えの大半があるはずだ。

班長ですらない私には、到底無理な話ではあるから他を当てる事にしたが、出来うるなら人伝ではなく、資料として残されたモノが欲しい。

カブトが持っていればいいが……

今日は一旦ここで筆を置く事にする。

今日これからの行動により、後日に考察の答えが残せる事を祈って。

合同競技会・前哨戦（前書き）

もう一回で上げるのは諦めました。

今回は前哨戦、本戦、決着？と分けようかと。

その中で男の戦い、女の戦いを散りばめて書く事にします。

もうぶっちやけノリだけでやってます。

今回はのんびり上げます。

というより、次回『も』のんびり上げます。

合同競技会・前哨戦

「今日こそケリ付けてやるッ！こんの陰険関西弁ッ！！」

「ま、はしたないこと。ほんま見るに耐えまへんわ……このトカゲ女は」

「誰がトカゲ女だって！？こんの冷血クモッ！」

「クモ……！？火吹きトカゲにはトカゲ女で充分ですやるッ！？」

またやってる……そんな思いに私は大きく溜め息をついた。

向こうの副官、今日の前でカーリアンとやり合ってるオリヒメの副官、サクヤも疲れを多分に含んだ溜め息を吐いている。

その脇では『銀鈴』のスズカがそのやり取りを首を傾げながら見ていたりするが……まあ止めてくれたりはしないだろう。

この2人のやり取り　睨み合いと罵詈雑言を含んだやり取りは顔を合わす度の事だし、それを毎回止めようなんて酔狂な人物などいはしない。

なにせ仲裁するのも命がけになる。

スズカなら2人を抑え込む事も出来るだろうが、さすがに毎回となれば面倒くさくもなるう。

……まあ彼女の場合は、最初の一度目からこの2人を止めたりは

しなかったけど。

いつであれどんな時であれどこであつても『我関せず』を貫いているし、いつでも不思議そうに首を傾げて眺めているだけだ。それに下手に顔を突っ込まれては逆に厄介にもなり得る。

「一回きっかりケリ付けてやる！」

「その口、氷りつかせたるわ！！」

さて、今回の揉め事の原因は、だが……もうこれも毎回同じ理由だつたりする。

懲りも飽きもせず、今回もまたこの2人はシャクナゲの事で揉めているのだ。

今回は『どちらが先に黒鉄に来たか』から始まり、『どっちが先にコードを持ったか』に繋がり、最終的には『どっちがより役に立っているか』となった。

どこにも『シャクナゲ』の『シ』の字も出てはきていないが、その全てが『どちらが先にシャクナゲに出会ったか（2人とも彼に拾われた）』となり、『どちらが先に彼に認められたか（コードを持つに至るには、当時のリーダー格だったアカツキを始め、シャクナゲと既存種の代表たるカブトの承認が必要だった）』に繋がり、『どっちが彼に必要とされているか』に帰結する。

2人は一切『彼』の名前を出していないが、彼の前での態度と、毎回彼に絡むネタでケンカしているのだから、バレバレもいいところだ。

「……カーリアン、落ち着いて。……深呼吸、深呼吸よ」

「フウ〜、フウ〜〜!!」

それは深呼吸吸じゃない。唸っているだけだ。

猫の威嚇みたいに唸っているカーリアンも、それはそれで可愛いけど。

さすがにいつまでもこのまま見ているワケにはいかない。

そう思えば嘆息が漏れる。

このまま見ていたら、間違いなく炎と氷が辺りを雑払うだろう。

そう思えば、肩にどっしりとした重石が架された気分だ。

それでも前のケンカ場所……民政部の本部真ん前にあつた廃屋みたいに、見事に炎の嵐で焼き落とされ、氷の舞で平地に馴らされる前に、なんとか止める必要があつた。

さすがに2回も続けば、前みたいにシャクナゲもフォローしてくれないだろうし。

「姫もお願いしますよお〜。お願いですから、これ以上『民政部』に目を付けられるような真似は」

「おシャラップっ!」

……向こうは向こうで、『響音』のサクヤが『蒼』のオリヒメを抑えようとしているが……まあ、あまり期待は出来なさそうだ。

小柄なサクヤは（まあ、私より若干背が高いのは認めよう）、その桃色の髪をピョコピョコ揺らしながら、やや長身な班長を抑えようとしているが、どう見てもオリヒメに引きずられている。

アワアワと手を振り回し、オリヒメを止めようとする姿は可愛いかもしれないが、残念ながら私はロリコンじゃない。

……まあ、年齢は一緒ぐらいだけ。

それに彼女の可愛さなど、私のカーリアンには到底及ばない。

……役立たず。

そうサクヤに毒づきながら、私は深い溜め息を漏らした。

どう考えてもこの場を抑えられるのは、私しかないだろう。

2人を抑える方法は幾つか考えているが、あんまりそれを無駄遣いはしたくないのだ。

……なにせもう本当に毎度の事だから。

「……親睦会をしましょう」

そして、そんな事にかまけている暇もないから。

「親睦会？このクモ女と!？」

「二班副官はオツムが弱いんとちゃいますか？こんなトカゲと仲良くなんて……」

「なんだって!」

「ふん!」

「……親睦会と言っても私達二・四班だけで仲良く普通に宴会をするワケじゃない。……所謂競技会みたいなモノ」

もう勝手にやってくれ、と危うく言いかけたけど、それはなんとか抑えて言葉を続ける。

「……三班や五班　ゴホン、『三班』や五班も誘って、黒鉄七班
合同で模擬戦闘競技会。……親睦を深められる上に訓練にもなる。」

……何よりそついう名目で民政部に通しておけば、文句も言われな
い」

敢えて三班の部分を不本意ながら強調し、そしてチラッとサクヤ
を見やる。

そのアイコンタクトの意味が分かったのか、サクヤはオリヒメに
しがみついたまま声を上げた。

「ヒ、ヒメ！どうせ揉めるならその時にしましょう！その時なら邪
魔も入りませんからあゝ」

「……カーリアンも落ち着いて。……ケリはシャクナゲが見ている
場所を着ければいい。……ほら、いい子だから大きく深呼吸よ」

この2人がいつであれ、どこであれ揉めるのは、今までキツチリ
ケリを着けさせていない辺りに原因がある、と私は思っている。

つまりそれが問題を長期化させている可能性があるのだ。

消化不良をずると引きずっているに近い。

一度キツチリと決着を着ければ、少しは大人しくなる……んじゃ
ないかなあ、と多少期待する。

それを合同競技会という形にしようというワケである。

もちろん私には他にもメリットはあるのだが。

「……まあ、いいですよ。陰険グモなんていつでも決着着けられる
し」

「それはこつちのセリフやわ、このトカゲ！大勢の前でバツチリ恥
かかしたります！」

「いちいち言い方が陰険なんだよ、このクモ女！」

「お気楽トカゲは知恵ないさかい、言い方がそう聞こえるだけやろ！」

ホント天敵だ。なんというか水と油というより、油と火だ。

相性が良すぎて、周りに迷惑をかける辺りとか、ばったり出会ったら被害が絶大な辺りとか。

やいのやいの『仲良く』喚く黒鉄随一の迷惑コンビを端に見やりながら、さて……と小さく首を傾げた。

目先に親睦会 という名前の喧嘩場所を晒した以上、ここで派手にぶつかり合ったりはしないだろう。多分……。

そうなれば私にはさらに考える事があった。

つまり他の班の連中に話を通し、参加させる方法を考える必要があったのだ。

「合同競技会？今度は何を企んでるんだ？」

「……それはちよつと失礼」

話を聞き終え、開口一番にそれはあんまりだ。そう思い、目の前の黒髪黒瞳の男を睨みやる。

場所は移って薄暗い元地下駐車場。現黒鉄第三班本部へと私は来ていた。

もちろん『合同競技会』についての打診をする為である。

出来れば全てのお膳立てをした上でここに来たかったのだが、黒鉄七班全てを巻き込む以上そうもいかない。

まずは三班　中でも班長である彼の承認を受ける必要があったのだ。

なにしろ彼さえ承認してしまえば、民政部は文句を言わないだろうから。

ついでに彼と仲がいい五班の班長も賛成してくれるだろうからだ。

だからこの一番にここに来たのに、彼の反応はあまりにも失礼だと思う。

それでもその男は気にした風もみせず

「じゃあ言い直そうか。どんな目論見があるんだ？」

なんて肩をすくめながら言いやがるのだ。

それに唇を多少尖らせてみせてから、小さく溜め息を漏らした。

ちゃんとカーリアンとオリヒメの確執や、問題が大きくならない原因まで語ったのに、まさかそれだけじゃ理由として足りないと言っのたろうか？

一度決着をきっちり付けるべきなのは、多分彼にも分かっているはずなのに。

まさかあの2人のいざこざくらいどうって事ない、とは思っていない。

「カクリさんが積極的に動くにしてはメリットが少ない……そうシヤクナゲはおっしゃりたいのですよ」

「……それも失礼」

睨みつけていた男の脇に立つ青年が、苦笑混じりにそう付け足すのを見て……小さく天を仰いだ。

さすがに一も二もなく賛成してくれるとは思わなかったけど、『絶対に裏がある』と頭から決め付けられるのは心外だ。

まあないとは言わないけど。

「合同競技会自体はいいと思うよ。でも参加は自由、コードのあるなし関係なく、参加は個人の意志による……その条件なら構わない」

「……ちっ」

したり顔でそう付け足すシヤクナゲに、私は見せつけるように舌打ちをする。

この競技会にかこ付けて、能力が分かっていないコードフェンサーの力を見ようと思っていたのに。

あわよくばアゲハやスイレン、そしてスズカの能力の一端でも見られれば……なんて期待して、『競技会』って形を取ったのに。

なんだかんだ言いながら、こちらの思惑を読んだかのように条件を付けてくるのが侮れない。

こっちの目論見が分かっているなら、最初からそう条件を付ければいいだけなのに、『何を企んでいる？』なんて聞いてくるのは、嫌がらせもいいところだ。

あるいは『あんまり裏工作ばかりするな』という忠告だろうか？
だとしたら余計な親切心で、デッカいお世話だ。

「ウチからはヒナが出るくらいかな？スイレンは面倒くさがりだし、ヨツバが出たら多分めちゃくちゃになるからね」

「まあ他の仲間も何人が出るでしょう」

「……ちょっと待って」

もう決定事項のように参加選手を語る二人に、私は慌てて待つたをかける。

「……スイレンやヨツバは構わない。……でもシャクナゲには出てもらいたい」

「悪いけど、俺も無理だよ。万が一競技会 多分トーナメント形式なんだろうけど、その初戦で俺が負けちゃう事があったら、決戦班たるウチのメンツが潰れちゃうからさ」

それは分かる。分かるけど簡単には納得はしない。

なにせシャクナゲが出るといふ形があるのとないのでは、盛り上がりが違う。

五班のカブトはカブトで、その名前が持つ意味は大きいけど、彼は既存種であり、戦闘能力は決して高くないのだ。

彼は裏方としては非常に優秀だけど、こういうイベントには向いていない。

まあ祭り事は好きそうだから参加くらいはしそうだが、それも記念参加だろう。

ならば最低でも、メインとしてシャクナゲには参加してもらわなければ困る。

彼が参加すれば、ひよつとしたらスズカやスイレンも参加するかもしれない……そんな裏も捨て切れないけど、なにより彼の名前がバツクに付けば、民政部とのやり取りが非常に楽になるのが大きい。そんな考えが彼には分かったのか、少し考えるような素振りを見せてから、チラツと隣に佇む副官へと視線を向けた。

「……どうでしょうか？確かにカーリアンとオリヒメの問題は頭が痛いところだし、あの2人の性格上、派手に決着を付ける事を望むのも間違いない。それにヒナだけを参加させて、初戦から強いヤツと当たってあっさり負けちゃったら、それはそれでちよつと情けないしね」

「そうですね。あまり深く考える必要もないとは思いますが、やはり勝ち負けを決める以上は、三班として情けない結果は頂けませんね」

隣の副官であるアオイは冷静にそう言うてから、チラツと私へと視線を向ける。

そして穏やかな笑みを浮かべたまま、言葉を続けた。

「それに問題は他にもありますね。トーナメント形式でいって、『万が一オリヒメさんとカーリアン』がぶつからなかったらどうされます？その辺りは考えてらっしゃるのでしょうか？」

……ちっ

本当に鋭い。

それを理由に……しかもそれを隠して、私に都合よく対戦表を作るつもりだったのに。

思わず舌打ちを漏らしそうになるけど、それはなんとかこらえてアオイを見やる。

「ですから、対戦の組み合わせについて私も一口かませて頂けると
いうのなら、ウチも全面的に協力させて頂く、という事でどうでし
ょう?」

あくまでもあの2人の決着がメインなので、運を天に
任せるくじ引きで、トーナメントをするワケにもいかないでしょう?
あくまでもにこやかなその笑みに、蹴りを入れてやろうかと内心
で葛藤しながら、不承不承それを受け入れる。

ここまで譲歩案を飲まされては、もうあんまり旨味がない。

オリヒメとの決着をカーリアンの勝利で終わらせ、なおかつ他班
の戦力を観察し、その上でその戦力をぶつかり合わせて、最後は私
のカーリアンに勝ち抜いてもらう……
そうすれば私のカーリアンの評価も上がるし、彼女もしばらくこ
機嫌だろう。

そう思っていたけど、そんな甘い計算は、やはりそうそう上手く
はいかないモノらしい。

「……分かった。……それでいい」

全然良くなかったけど、ここまで来てしまった以上、ゴネるのは
あまりにも情けない。

「では民政部には私から話を通しておきましょう」

「俺はカプトントコに顔を出してくるかな。久しぶりだし」

そんな風に立ち上がる二人と連れ立って、三班執務室を後にする

が、なんというかすぐくやり込められた気がして仕方がない。

私が話してから、参加者の募り方、そしてトーナメントの組み合わせまで、最初から話の流れは向こうに合ったような

「ちょうど良かったよ、カクリ。あの二人の対策として、同じような話し合いをちょっと前にアオイとしてたからさ。じゃあ書類の方は任せただから」

「……分かった。……地獄に落ちろ、雑草野郎」

にこやかに、というにはシニカルな成分が含まれ過ぎた、タイムリー過ぎるシャクナゲの言葉に、私は精一杯の悪態を返してその場を後にする。

そして、最後に押し付けられた感がある『合同競技会』に向けて必要な書類を準備する為に、自室へと足を向けたのだった。

合同競技会・一回戦（前書き）

やっとこさ久しぶりに更新いたします。

次回は早めに……出来たらなあ、いいなあ、多分。

では、いきなり一回戦へどうぞ。

合同競技会・一回戦

「……勝ちやがった」

思わずそんな本音が口をつく。

幸い仮説リングとされた広場に夢中のカーリアンには聞かれなかったようだが、チツと思わず舌打ちを漏らしたのは露骨過ぎたかもしれない。

シャクナゲとカブトの鶴の一声で開催される事になった、第一回黒鉄七班親睦競技会（仮名）であったが、思っていたよりも黒鉄の仲間達は乗り気で、予想よりもかなりの参加希望者が集まった。

それにより急遽予選で32名にまで絞る事になったワケであるが、残った32名はそこを勝ち抜いてきただけあって、本戦一回戦にはかなりのメンツが顔を揃えていた。

まず目の前のリングにいる二人からして、共に一班と三班のコード持ちだし、今まで消化した試合だけでも、すでに『碧兵』と『音速』、それに黒鉄唯一の純正型変種である『銀鈴』までもが出てきていた。

現在は、私的に一回戦最大の目玉であった第八試合『シャクナゲ対カリヤ』が終わったところであるが、その勝者である男が仮説リング上で愛想笑いを漏らしている。

「一班の『鉄拳カリヤ』を初っ端からあの雑草野郎に当てたのは、半ば以上から『負けまではしなくても、大苦戦くらいはして大恥かいちまえ』って気持ちを含めたモノだったのに、勝負はあっさりだった。」

もう、企画段階から割を食わせてくれた上、雑用まで散々押し付けられた腹いせがしたかったのに。

盛大に悔しがっているカリヤに、内心で毒を吐きつつも大きな溜め息を漏らす。

「あれ？カクリってばなんか不機嫌そうだね？」

「……別に。……きつとカーリアンの気のせい」

この企画、元々はオリヒメとカーリアン いや、もういつそカーリアンの為だけに立案されたモノだったのに、予想に反してかなり好評だったようで、今日のカリギュラ内は一種のお祭り騒ぎにまで発展していた。

防衛班たる四班と情報班……防諜班である六班だけは、その職務の関係上不参加を決め込んでいたが、他は軒並み参加していたりするから驚きだ。

五班班長のカプトなど、お祭り気分を盛り上げる為か、様々な屋台などを出しているし、あんまり乗り気ではなかった『碧兵』コガネに、班長命令で半ば無理やりトーナメントに出場までさせたくらいだ。

不参加に徹する事になった四班の中でも、班長である『蒼』だけは張り切りで、予選では可哀想な五班一般班員を氷付けにしていたし。

一班は一班で、模擬とはいえ競技会うんぬんよりも、三班とケリ

を付けてやる、とかで盛り上がってるし。

驚きなのは、普段はフラフラしている七班のスズカまでもが顔を
出していたりする事だ。

まあ彼女は、雑草野郎に付き合っただけかもしれないな
いけど、ひよっとしたら能力の一端でも見られるかも……と思えば、
俄然そそられる展開だと言えよう。

残念ながら、予選から一回戦までは相手がヘタレで、事前に全員
が揃って棄権しくさったけど、まだまだチャンスはあるだろう。

それにつけても、やっぱり雑草野郎があっさり勝ちやがったのは
癪だけ。

「さて、じゃそろそろ行ってくるわね」

「……ファイトよ、カーリアン。……相手は『アレ』だから遠慮は
いらないわ」

「油断はしないよ、アイツも強いからさ」

意気揚々と広場に向かう私のカーリアンに、発破をかけながらチ
ラツと対戦相手を見やる。

そこでしょぼくれ、大きく肩を落とした『不死身』の通り名を持
つ一班班長を。

『不死身のナナシ』と言えば、この黒鉄という組織の中でも1・
2を争う身体能力を持つ変種として有名だ。

正確に言えば、一番はシャクナゲで二番はナナシといったところ
だろうか。

ただし、ナナシの一番の武器はその高い身体能力ではない。

『超速再生』とも言える桁外れの自己治癒能力がそうだ。

その治癒能力と高い身体能力を持ってすれば、あの『黒鉄』のシヤクナゲを相手に回してもそうそうヒケは取らないだろう。

しかし、私は悠々とこの試合を眺める事が出来る。

いくら二班唯一のコード持ちである『紅』でも、普通ならばあの『不死身』のナナシを相手にするには、それなりに緊張感を持つべきだろう。

現にカーリアンはそこそこ緊張しているみたいだし、あたしも発破をかけてはみた。だけど、この組み合わせに限ればカーリアンに負けはないのだ。

こんなのデキレースもデキレース。結果の見た試合に過ぎない。

周りの観客は、『体面上一回戦最大の山場』となる『一班班長対二班班長』の試合に歓声を上げているが、事情を悟っているらしい一班の連中が集まっている辺りだけは、お通夜のような暗いムードが漂っているし。

私からすれば、この試合は一回戦のうちでも消化試合の部類に入る。

……なにせ変にウブな『不死身』は、惚れた弱味から『紅』に手を出せっこないのだから。

その向かい合う姿からしても対照的と言えるだろう。

緊張感をわずかに浮かばせながらも、やる気マンマンのカーリアンと、構えを取るべきか否かすら悩むようにうつろたえるナナシ。

苦笑を浮かべながら『始め!』の声をかけるカブト 予選で雑

草野郎に負けて、それから審判役を名乗り出ている　の声に、カーリアンが独特の構えを取り、その額から紅い熱線が生まれても、ナナシは構えすらも取れていない。

その細い熱線が彼女の体を走り、指先に集まって業火を生んでようやく構えを取るも、それじゃすでに遅い。

その熱線がスコープ代わりに突き出した指先から紅を生み、あやふやに構えを取ったナナシのすぐ側に着弾する。

そして着弾すると同時に燃え上がるカーリアンの『紅』。

「あんぎゃあああ

！！」

ついでに上がる『不死身』の悲鳴。

その炎が消えるよりも早く、カーリアンは次々と熱線を生み、体から、指先から紅を溢れさせていく。

耐熱仕様の服であれ、あの紅がただの炎だったのならば、今頃カーリアンは自らの紅に服を焼かれ、素っ裸だっただろう。

紅は『対象に対して発熱する指向性の高い炎』なのだ。

それが大地を舐め、宙を走る。ナナシを舐め、ナナシを食らう。

「……少しはかわせばいいのに」

律儀に毎度燃え上がっているナナシに、私は思わず溜め息を漏らしてしまふ。

もうなんというか……ハッキリ言ってナナシはバカだった。

大方『一目惚れした』カーリアンとあたる事になって混乱し、頭の整理がつかないまま向かい合ってしまった、その混乱に拍車がかかりまくっているのだろう。

カーリアンとぶつかるのが嫌なら棄権でもするか、適当に紅をかわしながら頃合いよく『参った』をすればいいのだ。

でもナナシは、一方的にライバル視しているシャクナゲとぶつかる前に、棄権なんてしたくなかったんだと思う。

ついさつきシャクナゲが、自分のトコの班員であるカリヤを負かしたばかりだし。

ウブで、愚直で、多分かなりバカ。だから私は安心して見ていられるワケだけど。

……あるいは被虐性嗜好なのだろうか？

もしそうなんだとしたら、ちょっとナナシとの距離を考えるべきかもしれない。

良くシャクナゲに勝負をふっかけては煙に撒かれたり、再生の効かない関節技を決められて悶絶してたりするし。

目の前では盛大に紅が燃え上がっていた。

カブトは観客席　という名前のリングの脇　に退避し、シャクナゲと何か話しているし、他の面々は『紅』の派手さに歓声すら上げている。

不死身のコードのごとく、どうせアイツは死につこないと思われているのだとしたら……さすがにちょっと憐れだった。

「ナナシのヤツ、調子悪かったのかな？　なんか動きが精彩を欠いてたんだよね」

「……心の病よ。……ほっとけば治るわ」

ナナシがプスプスと焦げ、いい焼き具合になって突っ伏したところで勝利を告げられたカーリアンが、帰ってくるなりそんな事を言

ってきた。

うん、と唸る様子からしても、さっきのデキレースに納得がいていないらしい。

そんなしきりに首を傾げながら唸っているカーリアンに、おざなりに返しつつも小さな溜め息を漏らす。

なんとというか、相変わらず彼女は鈍感だった。彼女以外のメンバー
ー 他の班長連の大半とか、一班の連中とか は大体ナナシの心情を読めてるのに、当の本人は全くわかっていないらしいのだ。そういうところも彼女らしさなんだと思う。自分がいかに魅力的な少女なのか、いかに他人の目を惹きつけるルックスをしているのかがわかっていないのだろう。

まあ分からなくもない。そうなった事情は分かるつもりだ。

彼女の過去、『死にたがり』とまで呼ばれた暗い時代を思えば。

『他人は自分を忌み嫌うモノ』、『自分は異端』という考えが根底にはあるのだろう。

確かに昔の彼女は怖かった。

今よりもずっと強大で、今とは比べたくもない禍々しい『紅』を使い、ヴァンプ達を燃やし尽くした東海地方随一のヴァンプ殺し。

その首にヴァンプ達にかけている賞金の額も、『黒鉄のシヤクナゲ』、三班のナンバー2にして近衛殺し（インペリアルキラー）『水鏡のスイレン』、黒鉄創設の根幹に関わった『カプト』に続く。

京のヴァンプ殺しオリヒメや、ロバーズキラー（盗賊殺し）とも呼ばれる『血濡れのシロツメ草』ヨツバ、関西に一大勢力を築いた『ゼフィーロス』のヘルメスを越えているのだ。

そんな彼女が自分のルックスに対する頓着や、普通の色恋に縁が薄いのも無理はない。

まあ、彼女の視線がある一点、たった一人の男に向いているから

つてのものもあるかもしれないが。

……本当に癩な野郎だ、あの雑草野郎は。

「一回戦はもう終わりかな」

「………みたいね。………この勝負は順当に『金剛』の勝ちみたい」

仮説リングの上では、一班最後のコード持ち、『金剛のメモ』……コードのいかめしさと呼び名のギャップだけはなんとかならないのだろうか………が、一班の意地を見せるべく三班の一般班員を圧倒していた。

一般班員とはいっても、対戦相手の男も三班の中に作られている小隊、『黒雉』の隊長格の男だったと思う。

シャクナゲ率いる最前線部隊黒狗、スイレン率いる攪乱部隊黒猫、アオイの防衛部隊黒兎小隊に比べると地味な小隊ではあるが、三班の一隊を任されるだけあって、金剛のコード持ち相手に善戦はしている。サイコキネシス系だろうか、なかなか強力な能力を持った変種のような。

だが、それでも金剛の勝ち揺るがないだろう。

「まあ、金剛も結構強いからねえ。相手もシャクンとこの幹部だけど、ちよつと分が悪いかな」

「………そうね、コードは伊達じゃないって事ね」

現にコード持ちは全員順当に勝ち上がってきている。敗れたコード持ちは同じコード持ちに敗れた者だけだ。

まあナナシは、コード持ちにやられたという感じじゃないけど。

「……それより二回戦は大丈夫？……次は」

「心配しなくても大丈夫だって！陰険オリヒメとは今日こそケリをつけてやるからっ」

「……心配はしてないわ。……信じてるもの」

一回戦は当然クジを調整して組み合わせを決めた。
三班との打ち合わせに抜かりはない。二回戦でカーリアンとオリヒメがぶつかるのも想定通りだ。

問題はカーリアンがオリヒメに勝てるかどうかだ。

カーリアンの紅は確かに強力だ。パイロキネシスト（発火能力者）の変種としては、間違いなく黒鉄最強だろう。

だけど、その紅にも欠点はある。

紅の威力は、カーリアンの感情の在り方に大きく左右されるのだ。特に『負の感情』 怒りや憎悪といった感情に。

こんな和やかな大会では、そんな感情が出てくるワケもないし、オリヒメに対してもヴァンプに対する憎悪じみたモノは持ってないだろう。

そこに不安がないと言えば嘘になる。

「陰険オリヒメの次は誰になるんだろ？シャクのトコの組に比べたら、こっちってメンツがまだ薄いよね」

しかし彼女自身は、負ける事なんか端から考えていないらしい。それが彼女らしいっちゃらしいけど、思わず苦笑が滲みそうにな

るぐらいは仕方ないだろう。

それをなんとか抑えて平静のまま言葉を返す。

「……そうね。……あつちは『黒鉄』に『音速』、『銀鈴』や『碧兵』がいるものね」

まあ、カーリアンの組も『蒼』や『金剛』がいるワケだけど。でも『不死身』はあっさり脱落したし、まだ楽な組み合わせなのはどう定出来ない。

まあそこはそれ、散々雑用にこき使われた料金だと思ってもらうしかない。

「ん、シャクと当たるのは最後かあ。まあ、それはそれで悪くないかな」

「……そうね、カーリアンが一番になる舞台としては悪くないわ。でも」

決勝に残るのが自分とシャクナゲだと頭から決めつけているのも、やはり彼女らしさだろう。

確かにファイナーレを飾るには、『黒鉄』を冠するあの男は相応しい相手だとは思うけど、あの雑草野郎が次を勝ち抜けるかは甚だ疑問だ。

なにせ次の相手はあの『銀鈴』だ。

黒鉄唯一の純正型にして、不思議系少女のスズカが相手なのだ。いかに黒鉄のシャクナゲとはいえ、彼女に勝つ事は厳しいと言わざるを得まい。

その事をカーリアンに告げるが、彼女は気にした風もなければこともなさげに、あっさりと言葉を返してくる。

カーリアン対ナナシ戦に関して私が思っていたような言葉を。それが当然の結末と言わんばかりの口調で。

「だってスズカってば次で絶対棄権するよ？たかだかイベント事とはいえ、あのコがシャクとバトったりなんて出来るワケないもん」

この組み合わせみたいなのをデキレースって言うのよね、きつと。

そう、そう言って肩をすくめてみせたのだ。

合同競技会・二回戦1（前書き）

またまたえらく間が開いたとです。もし楽しみにされている方が一人でもおられたなら、申し訳ないです。

マークとアंकクロ書くのが楽しくってですね、ほとんど書けていたのを1ヶ月近く放置しておりました。

次は『合同競技会・二回戦2応援合戦編』となります。変わらず語りはカクリさんです。

彼女が一番書きやすいんですよ。ちなみに一番書きにくいのはアオイさんです。

では、7月中に次をアップ出来る事を……まあ誓えたらいいなあ、とか思いつつ前書きは終了です。

合同競技会・二回戦1

「お腹痛くなった。だから私は棄権する」

そう堂々と 全くもっていつも通りの様子で語った銀鈴は、そのまま判決を待つ事なくテクテクとリングを降りていく。

最後に苦笑と共に肩をすくめているシャクナゲと、『どうせそんな事だろうと思った』と言わんばかりに笑うカブトに、ヒラヒラとその白い手を振りながら。

「だから言ったでしょ、あのコは棄権するって」

「……」

淡々と語るカーリアンの言葉に、何も返す言葉が出てこない。

「とういかな、今までも対戦相手が先に棄権したから勝ち残ったっただけで、相手が棄権しなかったらあのコが棄権してたと思うよ？ 無駄に誰かと争うのとか嫌いなコだし」

なるほど、確かに彼女は対戦相手の棄権でここまで勝ち上がったってきた。

多分『銀鈴』というコードに勝手に名前負けしたのだろう。

「スズカつては何にでも寄りたがるからさ、今回参加したのも多分『自分一人だけ不参加はイヤ』って思っただけなんじゃない？まともに参加してたらあのコが優勝してたんだろうけどさ」

「……そう」

なんとかそう返すも、それ以上何も出てこない。

私もかの銀鈴が優勝候補筆頭だと思っていて、その為に雑草野郎とぶつけて、互いに消耗させてやろうと考えていたのだ。

「それにしても、あのコの言い訳って毎回『お腹痛い』なんだよね。やりたくない事とか、面倒な事とかあったらさ」

「……カーリアンもよく使う」

「あ、あはは……あ、あたしはホントだよ？ホントにお腹痛くなるの。で、でもスズカつてば、その後パクパク食べてたりするもんだから、説得力なんかカケラもないと思わない？」

目をそらしながら露骨に矛先を変えてみせるが、今回だけは彼女に誤魔化されてあげる事にする。

カーリアンが腹痛という名前の仮病で逃げる時は、面倒な班長会議とか書類整理が溜まっている時なのだ。

それに対して下手にやる気を出されては逆に困る事になる。

カーリアンに書類整理を任せては、気になってこっちの仕事に手がつかなくなるし、班長会議に一人で出せば、何をしでかすか心配で胃がキリキリと痛くなってくる。

医者の不養生なんて間抜けをさらす羽目になる事が目に見えてい

「ミヤビもよく腹痛で仕事なんか出来ないとか言ってたけど……これって古参黒鉄連中の伝統かな？」

したり顔で語り続けるカーリアンに、私はこれ以上何も返せなかった。

いや、カーリアンとスズカの仮病の使い方は、完璧『錬血』の影響だろうとは思っているけど。

それにも何も返さなかった。

ただ無言でリング脇……先ほどまで座っていた、三班の連中が集まった辺りに戻り、ペタンと可愛く座り込んだスズカを見やっていただけだ。

結局他のコードフェンサーの能力については収穫ナシか。

そう思えばガツクリと体の力が抜けてしまう。

その視線の先では今大会で唯一興味の対象となりえた銀鈴が、収穫を終えたばかりのミカン　カリギュラ印無農薬　の皮を剥き、パクパクと口へと運んでいる。

おそらく、周りの連中の誰もがそれにツツコミを入れたかった事だろう。

あんたはお腹が痛かったんじゃないのか、と。

まあ、さすがにかの銀鈴にツツコミを入れる勇氣がある人物はそういないようだが。

唯一ツツコミを入れられそうなスイレンは、雑草野郎と同じように苦笑いをしているだけだし、スズカにも突つかかるヒナギクは、二回戦第一戦で『碧兵』に負けていまだに凹んでいる。

でも、例えツツコんだとしても、返ってくる答えが私には分かつ

た。

「なんとというか、私にさえ読めてしまったのだ。悪びれる事もなく『もう治った』とか言っただろうな、と。」

「ま、今んところはスツゴい順当に来てるよね。三班のガキンコはコガネに泣かされてたしさ。二回戦第二第三試合は順当なのかどうかわかんないけどさ」

「…………え、ええ、そうね。……………すぐく順当に来てるわね」

私の予定じゃ、今頃シャクナゲはスズカ相手に苦戦しまくってる中、こっちはスズカのデータ取りながら、高みの見物…………のハズだったんだけどね。

まあ、それでもなんだかんだ言って、あの雑草野郎が雑草らしいしぶとさを発揮して、ひよっとしたら粘り勝つかも…………とは考えていた。

なにしろ、あの銀鈴のスズカに勝てる可能性があるとしたら、シヤクナゲがカーリアンだけだろうと私は考えているから。

彼女を　銀鈴を恐れず、萎縮せず、向き合える二人だけだろう、そう思っているからだ。

だからこの試合だけは、デキレースだらけのトーナメントの中で、唯一価値あるモノになる……………そう思っていたのだ。

その試合すらも『向こう』が仕組んだデキレースだと知れば、ガツクリと肩から力も抜けよう。

どうりでスズカをこの枠に入れる事に反論も何もなかったワケだ。

こつなつてしまえば意趣返しは、準決勝で当たる予定の……もはや確定に近いけど……コガネに期待するしかない。

『碧兵』コガネ。

またの名を『雷人コガネ』。

二人しかコード持ちがない五班を、三班に次ぐ戦力を持つ班へと持ち上げている一翼が、『碧兵』と呼ばれるエレキネシストであるのは間違いない。

ネームバリューはかの『幻影』に及ばないにしても、五班最大級の戦力となつているコガネならば、皮肉屋で小生意気な雑草野郎をギャフンと言わせてくれる可能性は相当高い。

なにせ、このコガネ。普通に班長クラスの能力を持っているのだ。カーリアンやオリヒメと真つ向からやり合つても、普通に勝つ可能性はかなり高い。

先ほど三班の『音速』を相手に、何かをさせる暇も与えずに昏倒させていたし。

まあ、さっきのは経験不足の音速が、ガチガチに緊張していたからというのもあるだろうが。

ともかく黒鉄最強のパイロキネシストがカーリアンならば、最強のエレキネシストがあつた碧兵なのは間違いない。

あの雑草野郎と当たるのは準決勝だが、今からコガネを煽りに

「んじゃ、行ってくるね？ ちゃちゃつと陰険関西弁を捻ってくるからさ、ちゃんと応援しててよ？」

「……分かった。……応援はばつちり任せて。……四班なんか目じやないくらい……ド派手な応援をしてあげる」

いく暇はないようだ。

私にはそれよりも重要なミッションがあったのだ。

危うく雑草野郎にノセられて、本来の目的を忘れるところだった。今はまだ『あの陰険黒ずくめ』を敵に回すのは得策じゃない。

まずはカーリアンの応援をしてくれる仲間達　　紅薔薇会の同士達への指示と根回し。

これを忘れるワケにはいかない。

なにしろカーリアンへの応援は、班単位で応援してくれる四班よりも圧倒的に少ない。

日常業務である警備に立っている者も多いから、ここに来ている四班班員の数は大分少ないであろうが、カーリアンにはその半分も応援者がいないのだ。

カーリアンはちょっと班内でも浮いているし、黒鉄内ではかつての噂から怖がられている面がある。

だから仕方ないと言えば仕方ないのだが、それを甘んじて受け入れて応援合戦に負けたとあっては、『紅薔薇会主席』の名前と『二班副官』の肩書き廃るといふモノだ。

こういつ時にこそ、普段から医療班のトップとして培ってきた、貸しやら恩やらの債権を回収すべきだ。

貸しつばなし、ツケつばなしは私の趣味じゃない。

義務感から面倒くさい二班副官になったワケでもなければ、神社総合病院の責任者を慈善事業でやっているワケでもないのだ。

そこまで考えると、意気揚々とリングへと向かうカーリアンを見ながら、私はスクツと立ち上がった。

……まずは同士達に応援の指示。アチコチに散らばって応援する事で、人々をカーリアン寄りにする工作はしてあるから、そろそろ行動開始伝えましょうか。

そう思考をめぐらしながらも、私はまっすぐにある場所へと視線

を向ける。

カーリアンを怖がっていない第三者達が集まっている場所であり、応援されたらカーリアン自身も喜びそうなメンツが集まる場所。つまり雑草野郎が仕切る『黒鉄第三班』+ が集まっている場所に向けて。

さて、あの連中が集まっているなら、ここは私自身が行くしかないわね。

たっぷり貸しつけた借りを、きっかり耳を揃えて返してもらおう事にしようか。

そんな事を考えほくそ笑みながら。

合同競技会・応援合戦編（前書き）

当初予定していたよりも、話をずっと短くしております。

全体的ボリュームも短くなり、なんか違和感があるかもしれません。この競技会編は消してしまおうかと思いましたが、それはかなり無責任なので、ざっと短く書いて終わらせる事としました。

恐らくこの競技会編は、あと1話か2話で終わり、次回からは1話できっかり終わる話を書いていくつもりです。

早めに上げる予定……予定ではありますので、気長にお待ちください。

合同競技会・応援合戦編

「俺は蒼ね、蒼に一枚!」

「ああ、私は紅かな、紅に二で!」

同士達に指示を出し、足早に向かった先、つまり黒鉄第三班のメンバーが集まっている辺りでは……何故か三班の連中が白熱した空気で、次の試合の勝者をネタにトトカルチョをしていた。

「あれ、もうすぐカーリアンの試合が始まりますけど、どうかされましたか?」

その中で中心に立っていた男……異様な熱気の中でも、いつも通りの穏やかな笑みを浮かべていた三班副官にその声をかけられて、私は思わず表情が引きつりそうになる。

何に對してかというと、その手に握られた赤と青に分けられた大量の札に。

「……それ、何?」

「賭け札です。お恥ずかしながら、今回の試合の胴元をすることになりました」

「……あつちは?」

ジャラジャラという音と共に、『ツモ！リーチのみで』『シヨボつ！』『ああ！俺の役満があ！！』なんて悲喜交々な声が響く辺りへと顎をしゃくつてみせる。

もちろん何をやっているか分かっていないワケじゃない。だけどこの場は麻雀やトトカルチヨをする場ではないハズだ。

何より副官自らが胴元をやらされており、それをにこやかに語ってみせるって辺りに目眩を覚えただけである。

「何って……麻雀ですね。スイレンさんがいれば、役満のオンパレードで一人勝ちになっちゃいますから、あそこまでは盛り上がりませんですけど、今日はなかなかの接戦みたいですね」

「……あつちは？」

「あそこでは、先ほどコガネさんに負けたヒナを囲んで、飲み会をしていたかと思いますが」

『ヒナに賭けてたのに大損しちゃったじゃんか！』という声や、『よく負けてくれた！ヒナじゃまだ碧兵には勝てないと思ってたんだよな、俺は！』とかいった声が聞こえてくるのは……幻聴なんだろうか？

あれは間違いなく、『負けて落ち込んでいるヒナギクを慰める為に、どんちゃん騒ぎをしている』といった類ではない。

ヒナギクが負けて喜んでいる声もあるし。

「で、カクリさんは何か御用でしょうか？今ちよつと手が離せないんですが」

その手が離せない理由が、トトカルチヨの胴元って辺りは、副官

としてはどうなんだろう……そんな事を考えてしまいが、それはなにか思考の奥深くへと沈める。

なにしろこの黒鉄第三班は、作戦がない日や訓練時以外はいつでもこんな調子だから。

仕事はきつちりやる。訓練は決して手を抜かない。どんな時でも周りの仲間に声をかけるようにする。その代わり遊ぶ時は徹底的に遊ぶ。

といったように、班としての行動規範の中で、わざわざ『遊び』についての項目があるぐらいに、仕事時間以外は非常に和気あいあいとした集団なのだ。

他の六つある班の中でも、これほど仲がいい班は他にはない。

もちろん訓練や仕事時には、どの班にも負けなくらい一生懸命やっているのだが、いざ遊ぶ時となるとアットホームというよりも、かなり緩い班となるのである。

なにしろ副官自身が賭けの胴元になっていたり、班長自身がそこでトランプを握って輪を組み、隣の班員が出した札に『ダウト』とにこやかに宣言していたりするぐらいなのだから。

「……ちよつと次の試合について話があつて」

「話、ですか。一体なんの話なんでしょうか？」

「……分かつてるくせに」

「さて、なんの事やら」

あくまでもしらを切りながら、手元に残ったままの札をより分けていく男は、いつも通りに飄々としていて。

白熱した周りの空気などどこ吹く風で。

そしてその視線を、私から私の少し後方へと移動させる。

そして

「どつやら四班のサクヤさんも、カクリさんと同じ用件のようですね」

そう言って、いつにない爽やか過ぎる笑顔を向けてみせたのだ。

さて、どうしようか。

いまだ始まっていない『紅』対『蒼』の前哨戦が、三班の連中が集まった場所で繰り広げられているなど、どこの誰が思うだろう。

『響音』、アオイ、私と並んで、ひたすら無言のまま、いっそ穏やかとも言える風情でおにぎりをパクついていたが、その周辺の空気は真冬の寒冷地並みに冷え切っていた。

『一』『二』『三』『四』の副官が並んで昼食を取っている様は、かなり異常な光景だったかもしれない。とりあえず周りの和やかな雰囲気には溶け込めていないだろう。

問題は、だ。先手を切るか、後手に回って様子を見るかだ。

恐らく『響音』も同じような事を考えているのだろう。様子を窺う気配がある。

何にしても、手ぶらで頼み事をしにくるその神経が信じられない。オリヒメの応援団なら四の連中に任せればいいのに、私の邪魔をするかのようなタイミングが底意地が悪い。

少なくとも私は、この企画に関して労力という対価を払っているし、三班の連中にも貸しを山ほど作っているのだから、全くの手ぶらというワケじゃない。

まあ、響音からすれば、『二班としての役割を果たしただけで、貸しを付けるなんて厚かましいにも程がある』となるのかもしれないが、私が貸しだと言ったら貸しなのだ。トイチだなんて暴利は貪っていないのだから、誰にも文句を言われる筋合いはない。

「アオイさん。実は折り入ってお願いがありました」

そんな事を考えている間に、響音から口火を切ってきた。

まだまだ彼女も甘い。そう彼女の評価表に罰点を付ける。

元から四班の方が応援団は大きいのだから、彼女には焦る必要などないのだ。私がいれるのをただ待てばいいモノを、勝負に出る辺りがツメの甘さだ。私が彼女なら、焦らずにひたすらねっとりプレッシャーを掛けて根負けするのを待つ。

まあ、親切にも彼女から切り出してくれたのだ。ここは乗るしかない。

「……待つて。……ここに来たのは私の方が先。……後から来て先に要件を済ます、なんて……あなたは少し礼儀を知らないと思う」

「あなたが要件を全く切り出さなかったからじゃないですか」

「……いつ、どのように話を切り出すかは……私次第でしょう？……その間も待てない程度なら……四班副官の器も知れたモノね」

「……ムッ」

先制点は頂いた。まあ、不服げにムツツリ黙り込みながらも、反論しない辺りは評価に値する。

私の言っている言葉は、一般的には正論に当たる以上、無闇に反論すればより泥沼にはまるだけだ。

ここで一気にやり込めなかった事に、軽く心中で舌打ちを漏らしながら、まずは先制しただけで満足する事にする。

「……アオイ、あなたとシャクナゲとその他にお願いがある」

「その他、ですか」

私の言葉に苦笑を浮かべ、スマートに肩をすくめてみせる彼に、私は小さく頷くだけで返す。

「……次の試合はカーリアンの応援をしてあげて欲しい。……この頼みを聞いてくれるのなら……今までの恨み　もとい、貸しはチャラにした上で……借りつて事にしてもいい」

「本音が少し漏れてますが」

「……それにこの頼みは断らない方があなたの身の為でもある。……もし断られたなら……次にあなたが傷を負った際……私はずいぶんつかり、エタノールを静脈注射してしまうかもしれない」

思わず固まる表情に、追い討ちをかけるかのごとく言葉を連ねる。

「……さらにつつかりしてしまえば……生理食塩水の代わりに……海水よりも濃い食塩水を点滴に使ってしまうかもしれないし……処方する傷薬に劇薬が混ざってしまうかも」

「どんなうつかりですか!？」

「……最近物忘れが激しい時期がある。……恐らくはどこかから定期的に回されてくる……雑務によるストレスが原因」

入れてくるであろうツツコミを予想して、あらかじめ用意しておいた返答を返すと、心持ち口角を上げる程度に笑みを作ってみせる。もちろん同じくツツコミを入れそうになっていた響音に、視線で牽制を入れる事も忘れない。

まあ、『どこかから定期的に回されてくる仕事』は、カーリアンがどこぞに迷惑をかけたなり、カーリアンがオリヒメと喧嘩した後に、穏便に後始末をもらう代わりに回ってくるのであるが、そこは意図的に無視しておく。

「……えげつない二班副官さんの話は終わりですか？」

視線の牽制をかくぐつて、なんとかそう断りを入れてくる響音に、軽く呆れたように 小馬鹿にするように肩をすくめてみせた。

「……交渉術と言って。……恫喝外交は立派な戦略よ。……最もちよっと頭の緩いあなたに言っても……理解は出来ないんでしょうけど」

「誰の頭が緩いんですか!？性格真っ黒で裏技しか使えない陰険さんには言われたくないんですけどっ!」

「……陰険なんて心外ね」

陰険なんて言葉が似合うのは、単にやり方が腹黒いだけで、硬軟

織り交ぜる知恵すらもない者の事だ。それは非常に不相応な評価だと反論させてもらう。

私は一応、軟も入れている。

硬の部分が多い事は否定しないけど。

「いや、陰険という一言で片付けるには、ちょっと悪質過ぎる気がしますけど」

「……ついっつかりの過ちを……人為的に見る事はあまり感心しない。……あくまでも断られたショックで……そういった事もあり得る、という可能性よ」

苦味しか感じられない笑みを浮かべながらのアオイの言葉に、私は詰め寄るように一歩足を進め　　ようとして、ピンク色の派手な髪をしたチビッコに邪魔をされた。

「安心してください！私はこんな陰険で腹黒で常識知らずのチビッコとは違います！誠心誠意、礼を尽くしてお願いに上がったのです！」

「……チッ」

後少し、断った際に予定している報復について、ちよつとだけ『割り引いて』語って聞かせれば、決まっていたかもしれないのに。

……というより、たかが数センチの背丈の差で、こんな『誠心誠意』だなんて甘い言葉を吐くガキンちゃんに、チビッコ呼ばわりされるなど心外極まる。

「だいたい、『誠心誠意』だの『礼を尽くして』だのと言葉にするだけなら、それも十分恫喝交渉だ。」

それらの言葉の究極型である、土下座を思い浮かべればよく分かる。目に見える形で誠意の言葉を押し付ける事が、本心から誠心誠意に当てはまるとでも思っているのだろうか？

「えつとですね、私の判断ではいかんともし難く……。一応三班は独立した班であり、どこかの班を特別優遇するといった事は」

「……おべんちゃらは結構よ。……そのネジが緩みまくって……
二、三本落つこととした可哀想な子とは違って」

「誰が頭のネジを落つこととした可哀想な子ですか!？」

言葉の途中でツッコミを入れてくる響音に、ビシッと指を突きつけて返答しつつも、アオイからは視線を外さない。

「……『個人』でカーリアンを応援してくれるように……。あなたから頼んでくれればいい。……特にシャクナゲは」

念を入れて話を通しておきなさい、そういつになく強気に話を進めようとして

「シャクなら嫌な予感がするから、離れた場所から応援するってどこかに行った」

掛けられたそんな言葉に、先ほどまで『ダウト』をしていた男がいた方向を勢いよく振り返る。

そこにいたのは、可愛らしいファアの付いた白いニット帽を被った少女が、カクンと首を傾げていて。

「あと伝言。『カーリアンもオリヒメも応援してるから』だって」

そう言つて、ドンマイといった感じに薄く苦笑いを浮かべて、熟れたみかんを手渡される。

それを思わず受け取つてから、テクテクと元いた場所に歩き去つていく『銀鈴』を見やり

「……アオイに関わつてゐる間に逃げやがったな……あの雑草野郎つ……」

「あぁっ！？いないじゃないですか！！ヒメになんて言えば……シヤクナゲのアホーッ！！」

同じくみかんを受け取つたらしい響音と顔を見合わせてから、どこぞから様子を見ているであろう『黒鉄』に、いつになく大きな声で呪詛の言葉を上げた。

とりあえず、こちらの勢いに吞まれているフリをして、自らが仕える班長が逃げる時間を稼ぎやがったニヤケ副官には……それ相応の報いを与えよう。そんな事を考えながら。

合同競技会・紺碧の雷人と徒花の欄外編（前書き）

今回は早かった。とにかく早かった。

めっちゃプロット無視でノリで上げた話なので、なんらかの矛盾がありましたら、コソツと教えて上げて下さい。

ちなみに。

シンフォニアもお読み下さっている奇特な方々の為に、本編よりも苦勞したパロディをあとがきに載せています。

足掛け3ヶ月ぐらいかけた、会話のみのお話です。

これでギリギリ文字数。

削って削って、考えて考えて。

本編はいいですから、あとがきの感想下さい（汗

合同競技会・紺碧の雷人と徒花の欄外編

「あはは……はあ、手加減なさすぎだろ、あの二人」

目の前で轟々と荒れ狂う二色の力を見下ろしながら、シャクナゲは大きく嘆息を漏らした。

強襲してきた『二』と『四』の副官をやり過ごした後、二人に首を絞められながらもニコニコしていた自らの副官を眺めやり……試合開始して間もなく、仮説競技場となった広場一帯が『紅』と『蒼』二色の力で、まっさらに平らげられていく様を、少し離れたところにある廢ビルの一室から見やりながら。

歓声がいつの間にか悲鳴に変わり、班長同士の試合に対する興味が恐怖に変わるのを見れば、顔が引きつるぐらいは仕方がないだろう。

観戦していた人々の避難指揮を取る為に、声を枯らして叫ぶ昔馴染みの男を見やりながら、頭を小さく掻きむしる。

「まあ、二人にはいいストレス発散になっただろうけれどね。代償がちよっとデカ過ぎる感じはするけど」

何やら叫びながら力をぶつけ合っていく二人の少女には、もはや周りの事など一切見えていないのだろう。紅の稲光が空間を熱く染め、蒼の煌めきが周囲を無差別に冷却していく様は、一種の異界の

ように感じられる。

すでに競技会とは名前ばかりで、全力でのガチンコバトルと化している事は明らかだ。少なくとも現在試合をしている二人には、辺りの様子が見えてはいないだろう。

それを引きつった笑みで見やってから、そろそろとその場から逃げ出そうとして、自分の副官に首根っこを掴まれた副官二人組の少女には苦笑が漏れる。

あの二人を応援して煽ったりなんかしたら、ああなるぐらいは分かってただろうに。またまだ甘いのかな？

そんな思いを笑いでかみ殺してから、そっと小さく伸びをした。

「さて、話があるなら聞いておこうか？どうせ競技会は中止、再開の予定も第二回の予定もなくなった。

そして今ここには誰もいない。ここなら気楽に話せていいだろ…

…『碧兵』」

自らの背後に佇み、ジツと見据えてくる緑髪緑眼の男に向かい合
いながら。

『碧兵コガネ』。またの名を雷人コガネ。

黒鉄結成以来でも、最強のエレキネリストであり、五班において最大戦力の一翼でもある男。彼は間違いなく黒鉄でも最高位に当たる能力の持ち主であり、現在進行形で迷惑を振りまいている二人の少女よりも強いであろう変種。

主な役職にこそ付いてはいないものの、彼の力を疑う者は誰一人としていない。『幻影のアゲハ』に並ぶ五班の最高戦力として、誰もが認識している古参の黒鉄だ。

今まで主に拠点防衛のみに携わってきたから関わる機会自体なかったが、その力は関西軍の精鋭部隊である『近衛』にも劣らないだろうと言われているほどだ。

もしコガネが前衛部隊所属だったのなら、今は亡き『錬血』に代わる『近衛殺し』の異名をも手にしていただろう……それほどの力を持っているのである。

その性格も、どこか冷静が過ぎる印象がありながらも意外と熱くなりやすいからか、その能力の割には同じ班所属の『幻影』よりも親しみやすく、何度かシャクナゲとも同じ作戦をこなした顔なじみであった。

そのコガネが、戦闘においていつも身に着けている濃緑の外套と、皮を重ねた軽鎧を身につけたまま、全身から緊張感にも似たプレッシャーが放っていた。

「シャクナゲ。競技会において貴方とぶつかる事が決まった際、私は手加減をするべきかとカプトさんに質問した」

「ふうん？」

その声からも緊張感が感じられ、シャクナゲはさらに漏れ出そうになった溜め息をこらえながら視線で先を促す。

「もちろん『今の貴方』を舐めていたワケではない。侮つてなど断じていない。貴方は間違いなく『黒鉄のシャクナゲ』だ。今のままでもあなたは『黒鉄』の呼び名を冠したほどの人物だ」

「……お題目はいいよ。納得がいかないからこそ、そんな物騒な出で立ちでそこにいるんだろ？」

そんなシャクナゲの言葉に、コガネは思わず息を呑み　小さく頷いてみせる。

「だが、真っ向から向かい合っつての戦闘ならば『今の貴方』よりは私の方が強いハズだ。それでも『この街で貴方が負ける事などあつてはならない』……そうだろう？」

「そうだね。俺の肩にかかる看板は簡単には下ろせない。下ろしちゃういけないものだ」

誇らしげと言うにはどこか倦怠感が含まれたその言葉に、コガネは小さく眉をひそめるが、それを気にした様子も見せずにシャクナゲは続ける。

「この街で戦うにおいて、俺は不敗でいなくちゃならない。常勝じゃなく不敗。最後の一線を突破されない為の防衛線でなくてはならない。それが『黒鉄のシャクナゲ』に望まれた在り方だからね」

「だったら何故、私は手加減をしろと言われなかったのだろうか？これは勘違いをされたくないのだが、別にそれが嫌だったワケじゃない。この街の為だというのなら衆目の前で無様に負けてもみせよう。しかし、何故『好きにすればいい』などとカブトさんは言われたのだ？」

「侮られているのか、はたまた信頼されての事なのか、それが分からないからここで直接闘り合っつて確かめてみよう……そういう事かな？」

その言葉にコガネは小さく頷き、軽く手をかざした。
紺碧の雷が走る、碧兵の碧兵たる由縁の力を集めてみせながら。

「私は不器用なんだ。分からないまま放つてはおけないし、今の自分の力を試してみたいとの欲求もある」

「……最初の理由は分かるよ。でも力を試してみたいって考えは危険だよ」

「知っているさ。私ももう新米じゃない。それくらいは十二分に承知しているよ。それでも私にはこうせざるを得ない。私はいざという時に三班を抑える為の力として、三班の剣と楯と呼ばれるあの二人に、いつまでも後塵を期しているワケにもいかないのだっ！」

シャクナゲはその言葉に耐えきれなかった嘆息をついに漏らし、ゆっくりとホルスターから銃を抜く。

自らの銘となった二丁のオートマチック。無限の空圧弾を放つ異物を。

「コガネはカブトと本当に良く似てるよ。不器用過ぎて、たまに周りを顧みなくなるとかそっくりだ。

手加減はいらないな？」

そしてその言葉を合図にシャクナゲは駆けた。

真っ直ぐコガネに向かうなどといった真似はしない。脆くなっていた壁を銃でいくつも穿ち、そこを鉄板で補強された頑丈なブーツで蹴破るとそのまま一気に駆け抜ける。

「ちっ……啄木鳥っ！」

そんなシャクナゲを追うかのようにコガネは収縮した雷球を放ち、それが手応えなくコンクリートに霧散された感触に舌を打つ。

すでにシャクナゲの気配は微塵もなく、この廃ビルの影に入り込むかのように消え失せていた。

薄暗い程度の屋内で、その壁を蹴破った際の粉塵と、紺碧の雷が走った一瞬の閃光に、先ほどまではつきりと感じていた気配が溶け込んだかのようにも感じられた。

そこまで状況を把握して、かの『黒鉄』がどういった闘い方を得意としているかをザツと頭の中で模索すると、思わず彼は歯を噛み締める。

黒鉄のシャクナゲは生粋の戦闘能力者だ。その無限の銃弾に限りはなく、射撃能力だけじゃなく身体能力もかなり高い。

しかしコガネは知っている。

いや、昔から廃都で戦ってきた者ならば誰でも知っているだろう。

黒鉄のシャクナゲは戦闘能力に優れただけの戦士ではなく、戦闘技能に優れた技能者なのだという事を。

例えば彼は、何度となく敵指揮官を『暗殺』といった形で討っている。部隊の頭脳だけを狙い、的確にそれを成し遂げている。

しかし、暗殺というモノは力圧しで出来るモノばかりではない。彼が銃を使うからといって、狙撃が簡単なワケでもないのだ。

狙撃には、的確に風を読み、流される弾道を読む能力が必要になる。例えメートル辺りミリ以下のずれも、距離が伸びればセンチの誤差となるのだ。いかに『シャクナゲ』が通常の弾丸ではなく、圧縮した空気を放つといえども、それは無視出来ない要素となる。

そして風を読む為には地形を知り、風見を立てて風を測り、時間ごとのビル風なども計算する必要がある。

もちろんそれだけではなく、敵指揮官もほとんどが変種なのだから、気を張り詰めている時に狙撃を行っても十中八九が失敗する。人を外れた感覚と身体能力、あるいは変種固有の能力を持つ相手に、遠距離からの狙撃などは成功率のかなり低い暗殺手段だと言えるだろう。

それでも彼が狙撃を何度か成功させているのは、彼が『圧倒的に敵の隙を突く』事に長けているからだ。

気を抜く時、油断する時を見定める力が高く、また弱味を見せてそれらの状況を作る事に長ける。待つ事を苦痛とせず、確実に期せるだけの精神力がある。

直接的な戦闘でもそうだ。

シャクナゲは決して自ら隙を見せず、隙を狙い続け、相手の隙を作る事に長ける。自らの気配を消し、呼吸すらも絶ったかのような隠行で敵を攪乱し、二手も三手も布石を置いた上で、確信を持ってから仕留めにかかる。

彼が攻めに転じた時には、すでにチエックメイトがかかっている、という事もザラだ。舐めてかかり、自ら罠に飛び込んだ関西軍の部隊を、長らく黒鉄として活動してきたコガネは何度も見た事がある。

この場所が厄介だったか。

そんな相手をよく知るからこそ、思わずそうコガネは臍を噛むが、すでに状況は手遅れだった。

シャクナゲの気配は、確実に僅かな闇へと紛れてしまっている。

その上、外から流れ込んでくる『紅』と『蒼』の戦意や能力の余波が、コガネの感覚器官を狂わせる。

能力でもって探索の輪を広げようにも、今いる廃ビルの方角へと避難してきている人々の気配』が邪魔をするのだ。

なるほど、全てが計算上の事、というワケか。

この場所に避難した事も、そして実際の試合の前にコガネがやってくる可能性も考慮に入れて、絶縁体まみれであるコンクリートのビルへと入ったのだらう。

人がおらず、誰の目にも止まらないここは、秘密裏に事を済ませたいコガネにとって都合のいい場所であった以上に、シャクナゲにとっても理想の戦場だった。

そう、この場所は間違いないコガネにとってはアウェイであり、シャクナゲのフィールドだ。

そうではなくては。

それでも怯みそうになる心に薪をくべ、俄然やる気を燃やしながらコガネはゆっくりと精神を集中していく。

音はない。喧騒は聞こえない。外から流れ込んでくる力も、外の二人の能力による高低まちまちな外気も気にならない。

その心を鎮めて、自らが内に秘める『紺碧の雷』をゆっくりと高ぶらせ、くすぶらせていく。

辺りには気配一つない。

待てども動きは感じられない。

思わず『すでにこの場を離れたか』という考えに傾きそうになる。安易に心を緩めそうになる。

見事すぎる隠行は、コガネを持ってしても恐ろしさを感じるほどだ。

いくらでも待とう。かの高名な黒鉄を、ここまで不利な状況

で相手取れたのだ。下手に勝負を焦る必要もない。組み合わせで本来行うはずだった準々決勝をここで行っているだけだ。

最高のモノにしなくては、五班唯一の本戦出場者の名前が泣こう。

そう心を定めて、誰にも邪魔をさせないと決めて ゆっくりと自らの内へと力を静めていく。

一気に最高の力を出せるように。

無駄に警戒し過ぎて、能力を損なってしまわないように。

我慢比べだと自らに言い聞かせながら。

そして しばらく外の喧騒のみが辺りを占めた後、最初に動きを見せたのは姿を消した黒衣の男だった。

最初に軽い発破音のようなモノと同時に、脆くなっていたらしい天井が崩れた。それを避けながらコガネが窓際に寄るのを待っていたかのように、割れたガラスをさらに粉々に砕きながら何者かが飛び込んでくる。

「ちっ ……!!」

それに軽く舌を鳴らしてから、雷を向けようとして……その窓を破ってきたモノが、ビニール紐で括られただけのスチール椅子だと理解すると、即座に注意を四方へと飛ばす。

しかしその時には、ぶち抜かれた天井を時間差を持って飛び降りてきた男が、粉塵に身を紛らわせるかのような低い姿勢で、その手に握った黒鉄色の二丁の牙を向けていた。

「帝釈……天輪っ!!」

咄嗟の反射に近い反応で、指先に雷の矢を引き絞り放つ。

肉体を持つ者には、絶大な殺傷能力を持つ紺碧の雷。それを手加減抜きで放ったのだ。

思わずコガネも、力を放った直後に『やり過ぎた』と舌を打つ。

相手は敵対するヴァンプではなく、同土たる青年だ。当然殺してしまうワケにはいかない。瞬時に冷静さを取り戻すも、放った雷は閃光の速さを持って青年に迫り

その青年は、腰元から金属製のナイフを引き抜いて、顔のすぐ後ろに放り投げると、黒い外套に頭を隠すようにしてそのまま雷のすぐ真横をすり抜ける。

雷は耐熱性に優れ、耐電性にも優れた外套や、電撃を通しにくい人体ではなく、放り投げられた金属製のナイフ。避雷針代わりとしたナイフに真つ直ぐ向かい、その標的に当たった直後に炸裂する。それを碧の光を背に駆ける男は、第二波を放とうと一度解いた集中を再度高めていくコガネへと一気に距離を詰めていく。

コガネが牽制代わりに雷の壁を張ろうとするも、その距離と男の速さの前ではすでに間に合わない。使わずに溜めておいた力が形となる隙もない。

その碧色の煌めきを逆光にして、ニツと歪められた口元をコガネは見た。

片袖脱ぎで頭まで覆ったその黒い外套の下で、かすかに笑みに歪んだ口元が印象に残った。

幾つかの布石でコガネの集中力を乱しただけで、口々に策もなく突っ込んでくるなどはまさか思わなかった。

自らが放った雷を全く恐れた様子もなく、そのすぐ真横をすり抜けるようにして、駆けてくる存在がいるなどは考えた事もない。

そんな思考にほんの一瞬 刹那にも満たない間、気を取られた瞬間、外套に覆われた肩からの当て身を食らわされ、吹っ飛ばされるとコガネは膝を付く。

その強烈な衝撃を受けても、なんとか倒れ込まない事で意地を見せても、勝負が決した事は自覚していた。

ここまで態勢を崩している自分を、いま相対している男が見過ぐすハズもない。

「俺の勝ち、かな？」

脱ぎ捨てた外套が押し当てられ、それ越しに固い何か額に当てられる。

黒い自動拳銃。

不敗を誇る、最強の黒鉄と同じ銘を持つ、二丁一対の武器の銃口を。

「……ああ、私の負けのようだ」

「気は済んだかい？」

コガネの言葉を聞き、シャクナゲはその銃口を外すと、エレキネシストであったコガネ相手には大活躍だった外套をぞんざいに肩へとかけ、膝を付いていたコガネにそつと手を差し出した。

「済んだワケがないだろう。こんな無様な結果、カブトさんやアゲ八には言えそうにない」

「……そうだな、笑われるだろうな」

無然として返すコガネに、シャクナゲはククツと漏れ出そうにな

る小さな笑いを口内でかみ殺した。

恐らくカブトは、自らの友人の勝利を喜びつつも、なんと声をかけていいのか困ったような顔をコガネに向けるだろう。

アゲハはアゲハで、露骨に落胆したような表情を見せながら、コガネにプレッシャーをかけて遊ぶかもしれない。

その二人を相手に、小さくなったコガネが頭を垂れている様を想像して、笑ってしまったのだ。

「クソっ、この三年でかなり強くなったつもりだったのに」

「強かったよ。間違いなくこの場所じゃなく、競技会で戦ってればコガネの勝ちだった」

「俺はここでもあなたに勝てるつもりでいたんだっ！」

ムキになったのか、フンつとばかりに顔を逸らすコガネに、シャクナゲは思わず浮かんだ苦笑だけを返した。

『碧兵コガネ』

黒鉄が誇る、最高のエレクトリックガン。

雷人とまで呼ばれる雷使い。

そんな彼が新人だった頃、当時の新人教育係であり、黒鉄一の鬼教官であった『錬血』に、『訓練しても大した使い手には成長しないだろう』と言われていたなどは、今の仲間達は思いもしないだろう。

『生き残るすべだけを叩き込んで、死なない方法を教えるぐらいしか出来そうにない』と評価されていたとは、今のコガネを知る者には想像も出来ないハズだ。

あの暴走特急だった猪武者、『紅のカーリアン』ですらも一端の

黒鉄に育て上げ、他にも何人ものコードフェンサーを鍛え上げた『錬血のミヤビ』が、唯一その眼鏡を曇らせた男……それが碧兵のコガネだった。

ミヤビの教育係としての優秀さを知る古参の者ほど、今のコガネの成長ぶりには目を見張る。

なにしろ今では、当時からその『錬血』と同格と見なされていた『幻影のアゲハ』と共に、五班の最大戦力とまで言われているのだ。

それは偏にコガネの負けず嫌い、その性格にとっては最大の美点である、『努力を全く惜しまない』という姿勢から生まれたモノである事を、シャクナゲは知っていた。

錬血とまで呼ばれたミヤビでも、そんなコガネの内面まで計る事は出来なかったのだろう。そのひたすら真っ直ぐに自らを鍛え上げてきた実直さゆえに、カブトからは弟分として非常に可愛がられ、読めない性格をしているアゲハからも、からかいがいと頼りがいのある仲間として認められているのだ。

「次だ。次こそだ。三年……いや、一年以内に、どんな状況であれ、場所がどこであれ、あなたを超えるだけの存在になつてみせるっ！」

そう叫ぶように言い捨てると、コガネは背を向けた。それでも最後に軽く黙礼だけを残す辺りが、コガネのコガネらしさだとシャクナゲには思えた。

悔しさに歯を噛み締め、同僚達になんと報告していいものか悩んでいるであろうに、どこでも実直さを捨てられないのだ。

完璧にガラスの欠けたビルからその身を翻した姿にも、敗者としての憂鬱よりも悔しさに向き合う真っ直ぐさが見て取れる。

「ほんとさ、コガネも厄介なヤツだよ」

それを最後まで苦笑で見送りながら、シャクナゲは小さく溜め息を吐く。

「それに次こそはって意気込みは結構だけどさ、次はどうやって…
…どんな機会に、俺と闘り合うつもりなんだよ」

それなりに離れた場所で吹き荒れる紅と蒼。

それを見やりながら、この後始末は完全に二班副官と四班副官に任せてもいいのだろうか……などと考えながら。

合同競技会・紺碧の雷人と徒花の欄外編（後書き）

「ねえ、シヤクってさ、結構バカだよな」

「なんだよ、カーリアン。相変わらずいきなりだな」

「だってさ、一人で將軍にケンカ売りに行ったり、賞金首のクセに一人で日本中から仲間集めたりさ、普通やんないでしょ？」

「いや、カーリアン達を廃都に連れてきたのは俺だけど、他にも何人か出てたんだよ。確かにアカツキに振り回されてやらされた感はあるんだけどさ」

「でもミヤビとかアゲハは出てないでしょ？なんでシヤクだけそんな役割を請け負ったのよ？」

「……他のヤツらは、みんな『廃都から出たら腹が痛くて死んじやう』とか、『顔に包帯巻いた女に仲間になってと言われても相手はひくだけでしょ』とか言っつて、嫌がってたんだよ」

「その仮病の使い方はミヤビらしいけどさ、アゲハの場合、包帯取ればいいだけなんじゃないの？」

「……………」

「あれ？なんかマズった？アゲハの包帯ネタは地雷だったりした？」

「……ああ、まあ、その、なんだ」

「アゲハって口元しか見えないけど、絶対美人なタイプだと思うんだけど」

「その、な。アゲハの顔は……………」

「あ、なんか傷があつて隠してるとか。詮索しちゃ悪かったかな」

「いや、そうじゃなくてな」

「……実は俺も見た事がないんだ」

「はっ？ないの？」

「ない。でも古参黒鉄達の間じゃ詮索しちゃいけないって事になってる」

「なんで？」

「なんでって……ミヤビに教わらなかつたのか？ スイレンの浴衣へのこだわりと、スズカのニット帽、アゲハの包帯。この三つには触れちゃいけないって」

「あ、スイレンのは聞いた。スズカは前に直接聞いたし」

「……ミヤビの中で、あの件はなかつた事になつてるのか」

「あの件？」

「昔、好奇心が強く、我慢の効かない黒鉄がいたんだ」

「ミヤビみたいだね？」

「その黒鉄は、アゲハの素顔に興味を抱いた。普通の黒鉄ならそういつた事には触れないんだけど、そいつはおかまいなしヤツでな」

「……ミヤビ？」

「色々画策して見てやろうとしたらしいけど失敗続きで、ついに酒の力に頼る事にして、アルコールを山ほど持って部屋に押しかけたらしい」

「……」

「次の日、結果が気になつた俺は聞いたんだ。そうしたらミヤその黒鉄はこう言った」

「……ミヤビでいいじゃん」

「『あたしはなんにも見てない。なんにも知らない』ってな」

「……」

「それからアゲハの包帯は、手を触れちゃいけない領域になった」

「……賢く生きたいね」

「……そうだな」

合同競技会終幕・副官達の黄昏編（前書き）

副官バージョンと班長バージョンに分けました。
すごく長くなったから。

次で終わりです。競技会編。

多分今回みたいの間があく事はないかと思いますが、次回もよろしく
お願いいたします。

合同競技会終幕・副官達の黄昏編

「……ありえない……呪ってやる……七代先まで祟ってやる」

普段アオイとシャクナゲが班運営の実務を執っている三班執務室で、机にかじりつくような態勢のままひたすらにペンを走らせているのは、二班の副官であるカクリだった。

普段は無表情を心掛けている彼女が、今は疲労困憊といった様子で、ぶつぶつとなにやら不穏な言葉を撒き散らしているのだ。

その表情は鬼気迫るものであり、纏う空気もドロドロの怨念を感じさせるほどに黒く濁っている。それは幼子が深夜にでも目の当たりにしたら、深刻なトラウマになりかねないものだった。

「……終わらない……終わる前に死にそう……でも絶対ただじゃ死んでやらない……雑草班長……陰険スマイル副官……」

果てしなく後ろ向きで、どこまでも不吉で、言葉の端々に恨み辛みを乗せていながらも、その右手はひたすらに文字を綴っている。理由を知らないものが見たら、間違いなく不幸の手紙が呪いの文書を書いているとも思う事だろう。

いつものカクリならば、例えどれほど山と仕事が積まれていても、決して弱音や疲れは見せない。彼女の実務能力の高さは、その年齢には見合わない類い希なるものだ。

その面だけを見れば、副官という役職を持つ者の中でも三班の副官であるアオイに次ぐほどで、すでに古株であり、戦闘能力でいえば『副官ナンバーワン』である五班の幻影のアゲ八をも上回っているだろう。

それを周囲に示す為にも、自身の有能さを示して二班の価値を高める為にも、普段の彼女は絶対に情けないところなど表には出さない。

スマートかつクール。

その上で、時間や予定には出来るだけ余裕をもって優雅に。

さらにやるとなればどんな些事でも徹底的に。

それがカクリという少女のスタイルなのだ。

その彼女がここまで差し迫った姿を見せているだけで、現状がどれほど過酷なものなのかを窺い知れる。

彼女の目の前にはその現状を表すかのように、『始末書』および『関係各所の被害状況から見積もられた請求書』が山と積み重なっていた。

さらに言うならば、この部屋に入りきらない書類も別の部屋に山と積み重なっていたりもするのだ。

……室内に置かれた量のほんの倍ほど。

この部屋に缶詰め（軟禁）され始めて早三日、終わりの見えない苦行には、いかなカクリとて自分のスタイルを守り切れない。

特に『優雅に』という部分辺りを。

「なんであたしがこんな事を……」

そう半泣きになりながら、カクリよりも悲壮感を滲ませてペンを取っているのは、四班副官である『響音』のサクヤだ。

彼女の場合、ある意味ではカクリよりも悲惨だった。

彼女とて有能な少女だ。個人戦闘能力に限って言えば、『コード』を持つているところからしても、黒鉄内ではかなり高い部類に入るだろう。所属する四班内に限って言えば上位三指には確実に入る。

しかし書類の山に囲まれた現在の戦場では、高い戦闘能力など全くもって役には立たない。

この戦場での武器は銃や能力、身体能力などではなく、ペンと思考能力、そして忍耐力だ。実務能力こそが戦闘能力であり、それが共同で書類を片している二人の立場……つまり上下関係を決める事になる。

そんな苛烈な戦場において、サクヤの実務能力がカクリと比べれば数段落ちるといふ結果が、彼女を悲惨な境遇に置く事になっているのだ。

「……サクヤ……お茶」

「はあ〜い、すぐ淹れてきまあす」

つまりこの『二班・四班共同始末書対策室』と化した部屋に置いて言えば、カクリが主戦力でサクヤはそのサポートに徹する他ないのである。

「……ぬるい……淹れ直し……使えない……グズ」

「……すぐ淹れ直してきます」

もっとはつきりとした言い方をすれば、カクリが戦力としてほとんどをこなす代わりに、サクヤは作業の合間に小間使いのような真似をさせられていたりするという事だ。

さらにストレス発散の対象にもなっていたりもする。

そう、『徹底的に』のスタイルを持つカクリに、サクヤは姑が嫁

をいびる以上に難癖をつけられていた。

肉体的疲労度はカクリが（手を動かしている分だけ）、精神的疲労度ではサクヤが勝っているのが現状だ。

「ほら、キリキリ働いてください。そんな調子じゃ追加ばかり増えて、一生机にかじりつく羽目になりますよ？」

そんな二人の少女の監督役たるアオイは、一人優雅に特製の紅茶もどき（お茶の湯割りに香辛料と蜂蜜、ミルクをたっぷり入れた紅茶もどき）の入ったカップを傾けながら、にっこりと笑ってみせる。あくまでもにこやかな笑みではあったが、カクリやサクヤからすればイヤミとしか取りようがない。

足を組んで、一人のんびりと古本に目を走らせながら、思い出したかのように時折声をかけてくる辺り夕チが悪い。

水鏡のスイレンと交代で副官少女二人の監督に当たっている辺りも、ろくに睡眠すらとっていない二人には腹が立つ。

さらに言えば、暖かめられた飲み物から発するミルクの甘い香りが、何日もまとともに寝ていない二人には蠱惑的過ぎて、一種の拷問にでもあっている気分だった。

「……少しは手伝え……くそったれ」

いつもよりもずっと口汚い調子でその男を罵る辺りからして、カクリがいつぱいいつぱいな事が窺えた。

普段はオリヒメの教育からか先輩を立てるタイプであるサクヤも、恨みがましい視線を向けている。

甘いミルクと蜂蜜、微かなブランデーの香り程度では二人の疲れは紛らわせない。むしろ苛立ちの原因にすらなっていた。

「いやあ、あんまりふざけないで下さいよ、カクリさん？私がどれ

だけ苦勞して『競技会』の後始末をしたか分かっていますよね？」

「……」

しかしそんなカクリの言葉にも、血走った瞳にもアオイは全く動じていなかった。

むしろにこやかな笑みのままでピクピクとこめかみが引きつっている辺り、彼の方が色々と限界に近いようにも見える。

「紅と蒼が広げた被害を抑える為に、私達三班がどれほど尽力したか。」

カンカンに怒った民政部を抑える為に、私やスイレンさんがどれほど下げたくもない頭を下げて回ったか。

壊したもののや怪我人への慰謝料に、私達三班の貯蓄からどれほど予算を貸し出した事か。

まさか忘れたなんて言いませんよね？」

「……もういい」

「素直で結構です」

ここは副官達の戦場だった。

班長よりも実務能力の高いものが多かったりする副官達が、班長の代わりにその身を削り、魂をすり減らしてペンを振るう戦場だ。予算と支出を計算しては顔を青ざめたり、班の問題児を抱えたくない頭を班長の代わりに抱える孤高の戦場だ。

その場に華やかさはない。

誰かが見ているわけでもない。

それでもここが戦場である事にかわりはない。

表で三班班長シャクナゲと七班班長スズカに監督され、慈善作業と区画整理に駆り出された少女達の上官より、遙かに苛烈で救いのない戦場に副官二人は立たされているのだ。

ニコニコと痛いところを突つつく監督役と、たおやかな佇まいのまま、監督役よりもよほど鋭い口撃を試みせる交代要員に見守られながら。

確かにあの班長二人を抑えられるのは、シャクナゲか『銀鈴』くらいしかおらず、この副官二人をあしらえるのは、シャクナゲを除けばアオイかスイレンくらいしかないのだから、その人選も仕方がないだろう。

しかし二人の上官 『紅』と『蒼』の二人は、揃って実務能力が見劣りするからこそ体力を使う仕事に回されたはずなのに（蒼は実務能力自体低くないが、性格的に向いていない）、その仕事をそれなりに楽しんでいたりするのだ。

二人揃って監督役やお目付け役がいいところを見せようと、競って働いているぐらいであり、その働きぶりは周りの労働者達へも渴を入れていたりする。

不公平だ。

そう副官少女二人が思うのも仕方がないし

私達はなんにもしてないのに。

そう思つのも全く無理はない。

何故なら今やっている仕事の数々は、班長二人の尻拭いでしかないのだから。

第一回黒鉄親睦競技会（仮）。

最後まで仮称のままだったこのお祭り騒ぎは、結局優勝者を決める事なく終わりを迎えた。

準々決勝で当たった二人　カクリとサクヤの上司である二人による、100パーセント本気によるガチンコバトルの余波は、競技会の会場どころか、その辺りに敷かれた応援席や展開していた屋台にまで飛び火し、少し離れた場所にある『民政部』の本部まで影響を及ぼしたのだ。

被害にして建物三棟全損（再利用中のビル3つ）、半壊七棟（焼け焦げたビル一つ、水蒸気爆発による倒壊二つ、壁やガラスの破損四つ）、運悪く焼け焦げた貯蔵庫に貯蓄されていた食料多数。

怪我人は数人、と怪我人自体は少なかったが、せつかく競技会場となるほどに整理された区画を、また一から整備し直さざるを得なくしたのは、さすがに民政部を激怒させた。

しかし、これでも被害としてはまだマシな方だったと言える。

『紅』と『蒼』の力が辺り一帯に広がるのを、三班メンバーが防がなければ、軽く倍近い被害が出ていただろう。

『競技会』というお祭り騒ぎに、ほとんどのメンバーが参加していたのは『一』と『三』と『五』だけだ。

『二』と『四』は半数以上が勤務中であり、『六』も仕事柄かほとんどのメンバーが見物にもこなかった。『七』に至っては、参加者や見物人の中にスズカ以外の構成員がいたのかどうかすらもわかっていない。

しかも参加班の中でも、『一』は班長が不本意な敗北に凹んでいたから途中で帰ってしまったし、『五』は屋台を出したり舞台設営をしたりと主催側に徹していた為、被害を受ける側だった。物資的に最も大きな被害を受けたのは五班だ。

そういつた理由で、荒れ狂う紅と蒼を抑えるために前面に立ったのは、観客気分ではば全員……というか、一人を除いて全員が班長に付いて遊びに来ていた　班本部の警備はどうした、とつつこまねても仕方のない参加率だ　三班だった。

その借りは莫大なものとして請求されても仕方がない。

なぜなら、二班のメンバーは力の弱い人間達ばかりで救助される側だったし、四班は本来ならばそういった内部での警備にあたる側の班なのに、『班長自身が被害を起こす側』に立ってしまったのだ。犠牲者が多数出ていれば面目丸つぶれになりかねないところを、『人的被害は軽微』で済ませてもらえたのだから、ある意味では四班が作った借りのの方が大きいぐらいだろう。

そして民政部という政治を司る機関に最も顔が効くのも三班だ。三班の長は、かつて民政部の元となった機関……今は亡き『統括部』の長だった男の親友であり、今ではこの街の顔役でもある。

さらにいえば、実質的にはこの街の軍部でもある鉄の長代行とも言える男なのだ。

この男が間に入ってくれなければ、始末書や慰謝料もこの程度では済まなかっただろう。最悪罷免という形で、二と四の上層部の首が綺麗にすげ替えられた可能性すらある。

いくら民と武、政と軍の不可侵が暗黙の大原則であり、黒鉄が正確に言えば軍人ではなく有志の集まりだとしても、『民政』の部分に大きな被害を出したのは黒鉄の関係者なのだ。責任を求めるのは干渉ではなく、むしろ当たり前前の事ではない。

そんな微妙かつ難しい交渉には、民政部を相手にした水面下のや

り取りにおいて、黒鉄でも随一の手腕を持つ水鏡と、彼女にやり込められた民政部がお情けたっぷりの判決を下したとしても、彼が頭を下げたという体面があれば、お歴々の顔がなんとか立つだけの立場を持つ『三班ナンバー2』のアオイが骨を折ってくれた。

シャクナゲ自身が民政部に頭を下げればもつと寛大な処置が期待出来たに違いないが、それがさすがにマズい事ぐらいは、軍医の面が強い事務官であっても、そして彼に少なからぬライバル心も持っているカクリであっても理解している。

民政部が黒鉄という自衛組織の手綱を握るには、『黒鉄』を冠する彼を懐に取り込む事が一番簡単な方法だからだ。

そういった事情がなくとも、トップが頭を下げるというのは、どんなに不利な交渉だとして最後まで避けるのが原則である。そのトップの代わりに頭を下げる事も、腹心や側近の重大の役目である事は、かつての国家間の外交を見ても分かるだろう。

カクリやサクヤだとて、自分の従う班長の代わりであれば、個人的には絶対に頭など下げたくない相手に、下げたくない頭を神妙な顔付きで下げてみせるぐらいの事はする。

例えば今回の事でも、カクリからすれば絶対に頭なんか下げたくない相手、つまりはシャクナゲ（立場や利害、さらには心情的なものから）に、班長の為に平身低頭頭を下げたように。

シャクナゲ自身は『自分が民政部に頭を下げて穩便に済むなら』と考えていたようだ、それは副官であるアオイと、『水鏡』のスイレンが断固として猛反対したが為に、シャクナゲが民政部に頭を下げるぐらいなら、自分達が力づくで黙らせてくる時まで言った事は知られていない。代行として二人が民政部にとりなす形になったのである。

彼自身は、自分が頭を下げたぐらいで今の黒鉄の手綱を、あっさり民政部が握れるなどとは思っていない。自分はあくまでも一番

の古株であるだけに過ぎず、決定権や指揮権を持っているわけではないと思っっているのだ。

単に同僚が起こした不始末に対して、ちょっと顔が利く自分が取り成す、という認識でしかなかった。

しかし、二人は『それでもあなたが頭を下げる必要はない』、『あなたには頭を下げてほしくない』と言い張ったのだ。『それは自分達の役目だから』と。

それにシヤクナゲの方が折れたのである。

カクリからしても、仮にもしシヤクナゲが 三班の長である黒鉄が、自分の責任でもないのに頭を下げていたりすれば、体面的に返しきれない借りを作る事になっていただろうから、ある意味ではこれで最良な形で落ち着いたと言えるだろう。

もつとも今回の場合、最良が最も楽な道であるとは言い難いのも確かだが。

最後に予算については『借金』となる。

班としては最大規模を誇り、戦果においても群を抜いており、所有権のある土地も最も多く、それに比例して食料自給率も高く、民政部から送られる資金や物資も多い三班が、二班と四班に貸すという形で足りなかった分を補ったのだ。

ただでさえカツカツで遣り繰りしている二人の副官としては、この借金こそが最大のネックかもしれない。

「……ねえ、アオイ」

「なんでしょう？あ、手が止まっていますよ？」

それらの面を思い出し、自分がいつものように対等に話せる立場

にない事を自覚し、いつになく下手にでた　はつきり言えば媚びを売った口調に変えたカクリにも、アオイは冷静な態度を崩さない。それどころか向き直って、上目遣いに瞳を潤ませてみせるカクリにも　こんな真似をする所からも、カクリが追い詰められている事が分かる　彼はアルカイックスマイルを浮かべたままで、止まっているペンに対して注意までしてみせた。

それにカクリは一瞬だけ『グツ』と呻きだか恨み節の欠片だけを放ちながら、なおも監査役である青年にしおらしさを出来るだけ前面に出した表情で続けた。

「……もう指が痛いわ」

「そうですか、お疲れ様です」

「……もう右手にはペンを握る握力も出てこない」

「ならば反対の手を使ってください。使えるでしょう」

「……もう頭が回らないの」

「大丈夫ですよ。あなたならあと三日は持つはずですから。私が保証します」

「……休ませてほしい、そう言ってるつもりなんだけど？」

「あれ、伝わりませんでしたか？駄目だという副音を分かりやすく乗せたつもりなんです」

「こんなやり方で交渉が上手くいく相手かどうか分かっていない辺り、彼女らしからぬ思慮のなさが見える。」

さらに言えば、カクリが両手で書き物が出来る事ぐらい、この青年にバレていないはずがないのに、そこまで考えが向かない辺り『頭が回らない』は嘘ではないのだろう。

『そうアオイも考えたのか、小さく』そうですね』と呟くと、考えを巡らせるかのように視線を宙に走らせた。

そんな仕種に、今だけは全面的にカクリの味方であるサクヤは、隠しきれない期待を表情に浮かべた。

ひよつとしたら、三日ぶりぐらいにまともな仮眠時間を貰えるかもしれない。

『そう考えたのも無理からぬ事だ。』

心情は温情判決を待つ被告人そのものと言ってもいい。

仕事もなく、カクリに八つ当たり気味にコキ使われずに済む時間が貰えるなら、土下座というある種の精神的威圧交渉ぐらいしても構わない、とすら考えた。

むしろ年頃の少女であるはずなのに、進んで靴ぐらいなら舐めてみせようか、と考えるぐらいに壊れていた。

四班副官のメンツ　ひいては四班そのものメンツでは、三日ぶりの安らぎは買えないのである。

『うん、やはりここは心を鬼にすべきでしょうね。大丈夫です、作業効率が落ちるようでしたら、少し仮眠時間をあげますから』

しかし、サクヤがその行動を実行に移す前にアオイはそう言って、無慈悲な有罪判決を下した。

いつも通りののにこやかな笑みだが、どこか少女二人の期待と葛藤を見透かしていたように見える。

あんたがさつさと畳み掛けないから！

そういった考えが滲み出ているカクリの視線に、これから先はずっと激しくなるであろう『イビリ』を思つて。

表情の読めない青年の相変わらぬの笑みに、底意地の悪さを見て、サクヤは目の前に積まれた書類の山に突つ伏したのだった。

合同競技会・終幕1後片付け編（前書き）

遅れました。ぶっちゃけちょい寝るつもりが爆睡で、日付変わるまで一度も目が覚めませんでした。

今回は一応ラストです。

オリヒメがちょっと表に出る話になる予定。

はやく更新……出来たらいいなあ。

合同競技会・終幕1後片付け編

「よっしゃ、今日も頑張って行くわよ、みんなっ！」

雄々しく拳を突き上げながら、カーリアンは周囲に集まっていた二班有志のメンバーにそう声をかけた。その声からはどこまでも上機嫌な事が伺える。

とても『罰仕事』をさせられている人間の出す声ではないし、そんな雰囲気もない。

いかな彼女でも、最初の頃　あの黒鉄の黒歴史に燦然とその名前を残した『第一回黒鉄競技会（仮）』が終わったばかりの頃は、さすがにしおらしい態度だった。彼女とてやり過ぎた自覚は十分あったし、これでまた仲間達に怖がられて距離を置かれるかも……という考えに憂鬱にもなった。

しかしそれも罰仕事も四日目ともなれば、その名残はすでに欠片もない。

当初こそ自分のせいで……カーリアンからすれば自分が3、オリヒメが7の割合で悪い事になっていたが……仲間達に迷惑をかける事に対する申し訳のなさから小さくなってはいたが、彼女の性格からしてそんな態度が三日と持つはずがないのだ。

朝早くから全くもっていつも通りの様子で、オリヒメとぶつかり合って綺麗に平らにした一角の中心部に立つと、集まってくれた数十名の仲間達の中心に立って勝鬨のごとき声と共に気炎を吐いてい

た。

彼女は今日も絶好調だった。

昨日の仕事がカーリアンなりにかなり満足のいくものであった事も大きい。何より今日も自分を手助けするべく集まってくれた仲間達の存在が嬉しかったのである。

彼女は今までずっと自分は二班の中でも一人ぼっちなのだと思ってきた。カクリ以外の仲間達は、嫌々ながら自分と同じ班にいてくれているだけだとばかり思ってきたのだ。

死にたがりの紅。

カーリアンが持つその二つ名は、同族殺しとしては随一の知名度を誇っている。

主義も主張もなく、自らが生きる為ですらもない。ただ同族を力を誇る新たな人間を、憎しみという焔で殺し続けてきた悪魔として、その名前を知らぬものは黒鉄には一人もいない。

京の同族殺したるオリヒメとは共通点の多い彼女だが、この二人の間で大きな違いを挙げるとすれば、オリヒメは徹底的に復讐相手を打倒する為だけに力を振るい、その結果として同族殺しとして名を馳せた事に対し、カーリアンは力を持つ人間とそれに従った全てに憎しみを向けた点がある。

オリヒメは彼女が家を離れている隙に兄弟を殺され、その報復を果たす為だけに動いた。なんとしても仇の情報が必要だったから無闇に敵は殺さず、必要な情報をくれた相手は生かして情報を得る方法をとった。

カーリアンは自らの目の前で両親を殺され、その結果力に目覚めた。しかし、次の瞬間には制御の効かない力が仇を討っており、そんな過程では彼女の憎しみが晴れるはずもない。

結果、彼女は仇とよく似た人間……力でもって好き勝手する人間とそれに従う人間に憎悪を向けて、その全てを敵としたのだ。

そんな違いから、同じ同族殺しではあってもカーリアンとオリヒメに対する仲間達の評価は全く違う。オリヒメは当然の怒りを仇に向けた人間で、カーリアンは八つ当たりで死を振り撒いた殺人鬼と認識している者も少なくはないのだ。

残虐なる殺人鬼。灼熱纏う死神。黒鉄最強の炎使いにして最悪の焰使い。

そう仲間達に思われている事をカーリアン自身が知っている。そんな自分は怖がられていて、恐れられている事が当たり前で、いくら『あの時』から変わったつもりではいても、避けられるのは仕方のない事だとそう思ってきたのだ。

だからオリヒメと共に、二班と四班の連帯責任として人数を集めて綺麗さっぱり平らになった区画を整備する事になった当初は、正直に言えば憂鬱で憂鬱で仕方がなかった。

オリヒメはきつと仲間を集めて作業をするだろう。なんだかんだで面倒見がよく、班長のくせに妙に手のかかるところがある彼女は、同じ班の仲間達から人気も高い。

でも自分は一人でやらなきゃならない。

監督役になった男とその交代要員の少女に、誰も助けしてくれる仲間を集められず、たった一人で作業をする寂しい姿を見せる羽目になるだろう。

そんな情けない姿を見せるのが嫌で嫌でたまらなかった。

そんな考えに、重い足を引きずって初日作業すべくやってくればそこには見覚えのある仲間が十数人もいてくれたのだ。これには喜ぶよりも先に驚いてしまい、思わず自らの頬をつねってしまったくらいだった。

最初はカクリが頼んでくれたのかと思った。

自分の副官である少女ならば、そのぐらいの気は回してくれるだろう。

『カーリアンに恥をかかせるぐらいなら、自分が七代先まで語り継がれるほどの赤っ恥を全世界に晒した方が全然マシ』

などと大真面目にいうぐらいなのだ。

前日にアオイに引っ張って行かれて以来会っていないが、彼女ならば事前に手を回すぐらいやってのけても不思議ではない。

そう思ったのだ。

しかし例えカクリの手回しであっても助かった。それは事実だ。

だからみんなを怖がらせないように、出来るだけ隅っこで仕事をしよう。一人っきりの寂しい姿を『あの二人』に見せなくて済んだだけでも十分に有難いだから、これ以上何かを望むなんて贅沢つてもものだ。

そう考えて、カーリアンがキョロキョロと自分の立ち位置を探していた時の事だった。

その集団がいてもあっさりと彼女に 怖がっているはずの班長に近づいてきたのは。

そして困惑を通り越して立ち竦んでいたカーリアンを囲むと、仲間達は口々に彼女へと声をかけてきたのである。

『惜しかったなあ、競技会。あのまま続いてたら絶対ウチの班長が勝つって思ってたんやけど。無効試合やったらそらしゃあないわな』
『そうそう。あんまり気落ちしなくても、ウチらはみんなカーリアンが勝つてたつて信じてますからっ』

などと、カーリアンと同じぐらいの黒鉄歴を持つ若い仲間達は口々に言ってくれて。

『よしっ。じゃあチャツチャと片付けて、競技会で付けられなかった決着はこの片付けの出来で付けちゃいましょう』

『四班の連中に、俺ら二班が内勤ばっかしてる頭でっかちじゃない

ってところを見せてやるか』

なんてカクリの側近達が腕捲りをしながら笑ってみせて。

『いつも班長には助けてもらってますからっ。俺らに任せて班長は休んでてくれていいっスよ!』

『わ、わたしも手伝わせてくださいっ! 足は引っ張りませんからっ』

カーリアンが班長になってからの新入りメンバーは、そう言っ
てキラキラとした瞳を向けてきて。

あれ?と思った。

なんで?とも思った。

ひょっとしてカクりに頼まれたから来てくれたんじゃないの? なんて都合のいい考えが浮かびかけ、それをあり得ないと振り払った。ついでに雲の多い空を見上げて、今日もいい天気だなあなどと現実逃避までした。

そうしてしばらくフリーズしてからちよつとした希望を あり得ないはずで、望めないはずで、でもひょつとしたらという想いを 持って、カーリアンからすれば望んでやまない希望へと考えを馳せる

あたしは仲間で、ひょつとしたら仲間だからあなた達はあたしを助けてくれるの?

だって一人だと思っ
てきて、一人だったはずで、みんなは自分を怖がって、恐れていたはずだったのだ。それだけの事をしてきたという自覚もある。

自らの手は血塗れで、人を焼き殺した時の異臭が消えない人間なんだと知っている。

だから呆気にとられて、間抜け面をさらして。

そんなカーリアンをそつちのけで、集まったメンバーの中では古株の数人が仲間達に指示を出していく。

『数はまだ負けてつけど、数で勝負してんじゃねえからな。少数精鋭だ、少数精鋭。ウチは元々数が少ねえんだから、参加比率じゃ全然負けてなんかねえぞ』

『でも明日以降はもうちょい声かけて頭数増やそうよ。目指すは完全勝利っしょ？』

『シフト入ってないヤツ全員引つ張ってくるか。最近では表で戦闘もないし、手が空いてるヤツもいるだろ』

『てかね、ウチのメンバーで班長に借りがないヤツなんていないんすから、適当に首根っこひっ捕まえて連れてくりゃいいんすよ』

しかもなにか彼女の預かり知らぬ間に、明日以降はさらに人数を集めようと話を進めていたりまでする。

『ま、ともあれ今日はこれでやるか。手え抜くんじゃねえぞ、ウチが纏まりがない班だっと思われると、そのままカーリアンやカクリのメンツに関わってくるんだからな』

『あいあいさー』

むしろ陽気な雰囲気では話を纏めると、円陣まで組んで気合いをいれていた。

どうすべきか、どう考えるべきか頭が回らず、いつもなら隣にいるはずの白い少女に意見を求めようにもここにはおらず、とりあえずポーツと成り行きを見守るカーリアンに、円陣を組んでいた一角がバラけるとちょいちょいと手招きをされる。

『いや、カーリアンが入らなきゃ俺らだけが空回りしてるみたいだろ』

えつと……、やるの？なんか恥ずかしくない、それ？

なんて思いながらも、いつの間にかやら円陣の中に自分もいて。

揃って声を上げるメンバーに気圧されながらも同じく声を上げていたりする。

その後、メンバーの中ではカーリアンよりもやや年かさの女性が、その場にいる全員に赤い布切れを手渡していく。

それはただ紅く染められただけの腕章だった。安物の安全ピンすら付いておらず、針金を折り曲げて作ったクリップもどきで服に留めるだけのものだ。

それを皆に渡していき、一際大きく作られた腕章をカーリアンに手渡した。

『紅薔薇会からの差し入れ。ほら、やっぱりお揃いの何かが同じ目的に向かって進むチームには必須でしょ？』

紅薔薇会って何？

そんなカーリアンの疑問には誰も答えてはくれなかった。二班内部分で着々と勢力を広げつつある紅薔薇会なる謎の集まりについて、カーリアンだけがその存在を知らない事は周知の事実だったからだ。みんながみんなその『本人非公認のカーリアン親衛隊』に入っていたわけではないが、小さく苦笑を漏らしただけで揃ってその腕章を付ける事には誰も異議を挙げなかった。

結局三日経っても紅薔薇会なる謎の会についてカーリアンは分からないままだったが、それでも構わなかった。

『同好の志による集まり』という説明で納得する事にして、彼女の直感が訴えかけてきている不可思議な違和感については無視する事にしたのだ。

みんなはその怪しげな会の事を分かっているらしく、聞いても露

骨に話を反らされたりするが、それでも『危険を感じない』から構わないと思えたのである。

こんなにも仲間達が協力するべく集まってくれている。自分を助けてくれる。話をしてくれて、話を聞いてくれる。

それだけでもカーリアンの気合いは鰻登りで、今にも成層圏を突破しそうな勢いだったから、その会についてよりも日々の仕事へと意識が向いていたのだ。

対する青の腕章　二日目から真似てきた　を着けた連中にも、今の自分達ならば負けるはずがない。そんな確信を抱くほどにカーリアンは今日も気合い満タンだったのである。

「……ああ、その二人とプラス。初日からもう何回言ってきたかは忘れたけど、これはあくまでも罰であって勝負の種目なんかじゃないんだからな？ そのところはちゃんと分かってくれてるんだよな？ つか絶対分かってないだろ、お前ら」

「私が見ていた中では、その台詞は記念すべき二十回目になる。みんな楽しそうで羨ましい」

「そりゃあいつらは楽しいだろうよ、整備計画抜きで片っ端から片していくだけなんだからな」

もちろん監督役たる男だけは、初日からぶつかり合って張り合っただけの二組にいい加減げんなりしていたが。

ちなみにその隣にいる交代要員兼監督補佐たる『銀鈴』の少女は、殆どの時間を刺繍をして過ごしながら、気分次第で整備作業を手伝

ったり、日向でゆつくりお昼寝したり、のんびりとお茶をしたりとオリエンテーション気分満載だった。

監督役である男も彼女にだけは甘く、文句をつけたりはしない。少女の立場はあくまでも『善意による協力者』なのだから文句を言えるわけもないが。

今も作業初日からやっていた刺繍を続けるべく、地面に御座を敷いた上にちょこんと座り、刺繍道具を周りに配置している途中だったりする。

その膝の上に置かれた無地の小物袋に縫われている柄は翼。灰色の糸と金糸が複雑にいりくんで縫い込まれ、広げられた翼をモチーフとした柄へとなりつつあるものだ。

彼女が趣味としている刺繍が施された品は、どれもこれもかなり凝ったものばかりではあるが、その中でも今回縫われている小物袋は渾身の力作らしく、道具の準備段階からしてその視線はいつになく真剣なものだった。

それが出来上がれば、いつも苦労ばかりしている兄にプレゼントしようとするなりに心を砕いているのであるが、当の兄からすれば監督役としてこの場にいる自覚を失っている事の方をなんとかして欲しかったりする。

「ああ、くそっ、もういいからとにかく作業始めてくれ」

作業前に紅と蒼が睨み合うのはいつもの事だった。

お互いがお互いに自分の班の方がいい仕事をしたと思っただけ、なおかつ二人共が相手もそう思っている事を知っている。

さらには監督役である青年からすれば、あらゆる意味でどっちもどっち。いい意味でも悪い意味でも五十歩百歩と感じていて、そんな印象を彼に持たれている事まで二人の少女は見抜いているのだ。

三日前より二日前の方が熱くなり、二日前より昨日の方がより熱くなり、今日は今までで最高に熱くなる理由としては十分だろう。

お互いがお互いに、誰に負けたとしても目の前のライバルに負ける事だけは絶対にイヤで、力比べや仲間比べで負ける事はおるか、死ぬ順番ですら目の前の相手にだけは譲りたくはないと思っていたりするのだから、このような絶好の張り合う機会には熱くなくても無理はない。

「オリヒメのヤツもカーリアンが絡まなきゃ落ち着いたヤツなのにな」

「同属嫌悪、もしくは近親憎悪。カーリアンもオリヒメが絡まなければそんなにむちゃくちゃはしないからお互い様」

恐らくこの場にいる誰よりも真面目に『罰仕事』をこなしてきた青年と、罰仕事が始まって以来ずっと機嫌のいらしい白銀の少女は、そんな事を口にしあつてお互いの作業を進めていく。

いきなり爆発する紅と蒼の危険物の間にたつて宥めたりすかしたり、時には声を荒げてしかりつけたりと八面六臂の活躍を見せる青年は、この三日でかなり疲れを貯めているのか幾分げんなりとした様子を見せ、白銀の少女は我関せずとばかりに……ただし周りに取り残されないように時折辺りを窺いながら趣味に没頭する。

色々と競技会の裏から工作した罰。シャクもカーリアン達と一緒に反省すべき。私はこの三人の監督役。

まさか妹分の少女がそんな事を自認しているなどとは、シャクナゲ自身思ってもいない。彼女も口には出さないまま、無茶苦茶をした張本人二人と色々画策していた兄を見張るだけだ。

彼女の機嫌がいい事はシャクナゲも気付いてはいたが、その理由は分かっていなかった。精々が自分やカーリアンと一緒に何かしている為に機嫌がいいのだろう、ぐらいにしか考えていなかった。

寂しがりでありながら人見知り。大勢の仲間という時の方が機嫌がいいのに、大勢の人に囲まれると気疲れもするという難儀な性格をした少女だから、これぐらいの人数でなおかつ『監督役』なる立場ゆえの距離感があるぐらいがいいのだろう。そう考えるのが精々だった。

まさか『この二人は私が見ていないと何をしでかすか分からない。やっぱり私がついていないとダメ』なんて考えて、それゆえに機嫌がいいなどとは思ってもみなかった。

「あ、こら、そこっ！揉めるなら精々殴りあいぐらいにしとけ！片付けが終わりかけてるからって資材を運ばせたのに、それをまた吹っ飛ばすつもりかよ！」

また何かしらつまらないきっかけからだろう。今日も始まって早々から向き合い、バチバチと小さな火花と氷の煌めきをぶつけ合う二人に、慌てて飛んでいく青年を見やって白銀の少女は溜め息を漏らした。

ああ、きつと気付いてはいないんだろうな。あの二人がやり合う一番大きな理由が自分にあるだなんて事は。

もちろん彼も、自分が二人に好意を持たれている事ぐらいは気付いているはずだ。そこまで鈍くはないと思う。

でもきつと憧れとか錯覚とかそれぐらいにしか思っていないんだろうな。

その上でそう確信もしていたのだ。

彼は鈍くない。空気を読めないわけでもない。

ただ彼は自分に対する評価が低すぎる。周りの仲間達が彼に対し

て持つ評価と反比例するかのようになり、圧倒的に彼自身の自己への評価は低すぎる。

それに比例して周りの仲間達に対する評価が高すぎる面もある。だから自分などに好意を持っている人は、きつとどこかで何かしら思い違いをしているか、『シャクナゲ』という名前を持った本当の自分じゃない理想の誰か』に憧れているだけ……そう考えているのだ。

だからあの二人がやり合う一番の理由に、彼自身への思いがある。だなんて事は結びつけない。

彼の中では、『シャクナゲ』に対する憧れや錯覚などは自分自身とは全く別の地点にあつて、それが『仲間同士』がぶつかり合う理由とは結びつかない。彼にはそんな実感がもてない。

自分への憧れを理解していながら、それを実感として持てないという矛盾こそが彼の歪みなのだろう。

まあ今までの事を考えたら仕方のない事。のんびりいくしかない。

私も、あの二人も。

小さく首を振りながらそうスズカは考えを纏めて。

彼女は四苦八苦しつつも二人の間に割り込む青年に小さな笑みを向ける。

オリヒメを指さしながらブーブー文句を言っているカーリアンと、軽く唇を尖らせて同じく何やら文句を言っているらしいオリヒメ。

ああ、今日もこんなに平和。

やんちゃやんちゃとリーダー二人に喝采を送る取り巻き供に一睨みくられて沈黙を促し、喧嘩両成敗とばかりに二人の少女に拳骨を仲良く一つずつ落とす青年をほのぼのと見つめ、チクチクと針を動かして

いく。

また仲良く抗議の声を上げようとする二人を、拳に息を吹き掛ける仕草で黙らせ、彼は罰として全員昼食抜きを宣言してから作業の再開を言い渡して、その場にいる全員に悲鳴を上げさせていた。

その『全員』の部分に、彼自身や監督補佐たる自分まで入っている事に内心で嘆息を漏らしてから、彼女はそつと空を見上げる。

彼は監督役であり、自分は監督補佐でしかないのに、なんでそんな罰まで一緒に受けなきゃならないのだろう……などとはスズカは思わない。

彼が昼食抜きだと言えば自分の昼食はない。それが当たり前だったからだ。

ただまあ、その変に生真面目なところは直した方がいいだろう、とは思っけれど。

本当に平和。

少なくとも彼女からすれば平和だった。

その辺り一帯が他の班の者達から『紛争多発地帯』などと呼ばれているとしても。

その調停役と兄が見なされているとしても。

彼女自身は、いつ暴走するか分からない『紅』と『蒼』に対する示威戦力として見られているとしても。

少なくとも『賑やかで大いに結構』と思える程度には平和だったのだ。

ちなみに荒れ果てた一角の復興作業は遅々として進んでいない。

三步進んでは二歩下がるかのように、作業が多少進むと誰かさん達が綺麗に地ならしをしてくれるから、広場として使うならば有用な土地になったであろうが。

こうして『第一回・黒鉄親睦競技会（仮）』は、親睦の言葉を全く実感させない形で幕を閉じる。

少なくとも目に見える範囲では、より悪化した感すら持てる結果を残して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4117i/>

黒鉄色のシンフォニア

2011年10月9日22時01分発行